

平城京左京三条四坊七坪

発掘調査概報



奈良国立文化財研究所



平城京左京三条四坊七坪出土 和同開鑄錢范 1:1

序

今から1200余年の昔、わが国の首都として栄えた平城京は、わずか70年あまりで廃都となつたといえ、当時世界に名だたる本格的都市であった。廃都以降その大部分が田畠となつてゐたが、南都諸大寺を中心に今日に至るまで都市として続いてゐる。

近年市街地の拡大に伴ない、旧態を残す田地の多くは宅地等に変わり、平城京の遺構が未調査のまま失われていく例が多い。その中で当研究所平城宮跡発掘調査部では、平城宮の発掘調査はもとより、京内の数10箇所においても発掘調査を行なつており、平城京研究の一翼を担つてきている。

今回の奈良郵便局移転計画用地の発掘調査は、近畿郵政局の依頼にもとづいて行なつたものである。この地は平城京左京三条四坊七坪に該当するが、いまでは奈良市の新市街地として近年特に開発の進行している地域であり、そのような状況下にあって今回の調査は坪の $\frac{1}{4}$ ほどを全面的に発掘することができたことは重要で、関係者に深く感謝したい。

調査の結果、この地は奈良時代を通して利用されていることが判明した。特に奈良時代の中頃から後半にかけて、ここで我国最初の銅貨である和同開珎を鋳造していたという新事実、更には、造営当初から坪中央に東西の小路が存在していたという事実は、今後の平城京研究に重要な資料を提供したといえよう。

これらの事実は、序舎建設のための事前調査によって偶然に発見されたものである。本来、平城京の発掘調査は、平城京究明を目的として計画的に行なわれるべきものであることはいうまでもない。また、一方で、その重要遺構の保存策をも積極的に講ずる必要があるであろう。今回の調査でもあらためてそのことが痛感される。今後とも京内において、組織的計画的な調査が行なわれるこことを願つてやまない。

1980年3月

奈良国立文化財研究所長

坪井清足

目 次

I 序 章

	頁
1. 調査の経過.....	1
2. 調査の概要.....	2
3. 等 頁 測 量.....	3
4. 金属探知機による焼土ピット分布調査.....	4

II 遺 跡

1. 遺 跡 の 外 観.....	5
2. 遺 跡 構.....	6
3. 焼 土 ピ ット.....	12
4. 古地と時期区分.....	15

III 遺 物

1. 金.....	17
2. 土 器.....	18
3. 木 器.....	22
4. 銭貨と鑄造関係の遺物.....	24
5. 和同開珎銭の分析と保存.....	26
6. 植物遺体と年代測定.....	28

IV 結 び

	29
--	----

図 版

卷 首	和同開塗錢范	PL. 1	6AFG-N・O区周辺航空写真
PL. 2	6AFG-N・O区全景写真	PL. 3	発掘区全景
PL. 4	発掘区部分	PL. 5	建 物
PL. 6	建 物	PL. 7	建 物
PL. 8	建 物	PL. 9	堀、柱穴
PL.10	堀、道路	PL.11	焼土ピット
PL.12	焼土ピット	PL.13	井 戸
PL.14	河 川	PL.15	木 製 品
PL.16	瓦	PL.17	土 器
PL.18	土 器	PL.19	錢 范
PL.20	錢貨と鋳造関係の遺物	PL.21	植物遺体
卷末折込	平城京左京三条四坊七坪(6AFG-N・O地区)実測図		1/200

挿 図

	頁	頁	
fig. 1 6AFG-N・O区発掘調査状況	1	fig. 2 平城京左京三条四坊七坪位置図	1
3 周辺航空写真	2	4 6AFG地区断面図	2
5 明治21年地籍図	2	6 空中写真撮影	3
7 標定点配置図	3	8 金属探知機による調査状況	4
9 造構検出土土層図	5	10 発掘区東壁(南側)土層図	5
11 発掘区東壁(北側)土層図	6	12 SE1801実測図	7
13 発掘区西壁土層図	7	14 SE1898実測図	10
15 中世河川 SD1915 土層図	11	16 焼土ピット実測図	13
17 焼土ピット分布図	14	18 七坪の占地	15
19 七坪変遷図(I)	15	20 七坪変遷図(II)	16
21 軒丸瓦	17	22 軒平瓦	17
23 繩文土器	18	24 焼土ピット群・SK1796出土土器	19
25 製塙土器	20	26 SE1801・SE1898・SK1848・SK1847出土土器	21
27 木製品	23	28 ^{14}C 年代測定用試料採取位置図	28
29 流木埋没状況	28		

表

	頁	頁	
tab. 1 標定点一覧表	3	tab. 2 金属探知機による測定結果	4
3 焼土ピット一覧表	14	4 計測座標表	15
5 和同開塗錢の螢光X線分析	27	6 植物遺体一覧表	28
7 ^{14}C 年代測定結果	28		

例　　言

1. この概報は、近畿郵政局の依頼により昭和54年4月から7月にかけて実施した、奈良郵便局移転計画用地（奈良市大宮町5丁目）の発掘調査に関するものである。
2. 調査は、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が担当し、工楽普通、吉田恵二、綾村 宏、安田龍太郎、亀井伸雄、中村友博、本中 真、佐藤 信、清川善樹、上原真人が参加した。なお、金属探知機による焼土ピットの分布調査は、西村 康、岩本圭輔、植物遺体の同定は、光谷拓実、金属製品の分析は、沢田正昭、秋山隆保が行なった。
3. 本書の作成には狩野 久、岡田英男の指導のもとに調査員全員があたり、全體の討議をもとに次のように分担執筆した。I-1, 2, 亀井伸雄、I-3, 本中 真、I-4, 岩本圭輔、II-1, 2, 4, 亀井伸雄、II-3, 中村友博、III-1, 中村友博、III-2, 安田龍太郎、III-3, 4, 工楽普通、III-5, 沢田正昭、III-6, 光谷拓実、IV, 工楽普通、綾村 宏、亀井伸雄。なお、樹木の¹⁴Cによる年代測定は、社団法人日本アイソトープ協会に依頼し成果を得た。
4. 本書の編集は、亀井伸雄、遺構・遺物・図版の写真は佃 幸雄が担当し、航空写真的撮影はアジア航測株式会社があたった。

平城京左京三条四坊七坪

奈良郵便局移転計画用地発掘調査概報

I. 序章

1. 調査の経過

この報告書は、平城京左京三条四坊七坪にあたる奈良郵便局庁舎移転計画用地（奈良市大宮町5丁目188、194、195、204）において、奈良国立文化財研究所が実施した発掘調査の概報である。

近畿郵政局では、はじめ昭和50年に平城京左京三条二坊六坪にあたる用地に庁舎の移転を計画したが、発掘調査の結果、日本庭園史上二期的というべき奈良時代の庭園遺構が検出され、その保存にあたり、当地での新庁舎建設を断念せざるを得なくなつた。今回の用地はその代替地である。
(註)『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』奈良国立文化財研究所 1976

調査は、奈良県教育委員会の指導のもとに受益者負担で実施されるこびとなり、近畿郵政局の依頼で奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が、発掘調査を担当したものである。

用地は、工場跡地を中心に北側の旧水田を含めた約7.8ヘクタールにおよぶ。発掘調査地は、庁舎の予定位置、関係車両出入口、現場事務所位置等を考慮して、用地の西半分に東西約55m、南北平均約60mのトレンチを設定した。また調査の過程で一部拡張が必要が生じたため、近畿郵政局の同意を得て、東側に東西6m×南北20m及び東西18m×南北10mの2回にわたりトレンチを延長した。

調査は、昭和54年3月23日から昭和54年7月19日までの約4ヶ月弱の期間、別記の工程で行なつた。調査面積は合計約3,460m²で、用地のほぼ三分の一にあたる。調査の結果、建物、堀、溝、井戸などのほか、新たに拡張した区域を中心として、東西約20m、南北約15mの範囲で、和同開珎、同銭范、同銭を鋳造するに關係したと思われる土壌や遺物多数を検出した。これらによって、七坪の京内での位置付け、坪内の利用状況の概要を明らかにすることができた。

なお、関係者の協議の結果、排土は別途搬出し、調査終了後は遺構の全面的な埋戻しは行なわず、柱穴や溝等に砂を入れ、養生をするにとどめた。

また、検出した柱根、井戸枠等の木製品はすべて取りあげ、PEG等の保存処理を施した。

(註)『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』奈良国立文化財研究所 1976



fig. 1 6AFG-N・O発掘調査状況



fig. 2 平城京左京三条四坊七坪位置図

調査日程

- | | |
|-----------|-----------------|
| 3.23~31 | バックホーによる表土・床土排除 |
| 4.2~11 | 表土排除 |
| 4.9~10 | 基準点測量・地区杭打 |
| 4.12~5.24 | 遺構検出 |
| 5.26 | 現地説明会 |
| 5.29~31 | 写真撮影 |
| 5.30 | 空中写真測量(セスナ) |
| 6.1~14 | 遺方実測 |
| 6.1~4 | 発掘区西北隅検査 |
| 6.4~6.11 | 発掘区東側第1次拡張 |
| 6.12 | 同 写真撮影 |
| 6.15~27 | 補足調査・土層図作成 |
| 6.21 | 発掘区東側第2次拡張区表土排除 |
| 7.2 | 第2次拡張区金属探査 |
| 7.2~7.6 | 拡張区遺構検出 |
| 7.7~7.9 | 拡張区遣方実測 |
| 7.10~7.18 | 拡張区袖足調査 |
| 7.19 | 遺構養生・調査完了 |

2. 調査の概要

平城京内の発掘調査は、ここ数年來条坊内における開発事業等に伴なう事前調査として行なう機会が増えている。その結果、これまで解明されなかった坪内の宅地割や建物の配置計画、また平城京の骨格をなす条坊の位置、幅員等に関する多大な資料が蓄積されてきた。

今回の奈良郵便局庁舎移転計画用地は、「金池」という字名を残す平城京左京三条四坊七坪の中心部分を占めるため、坪内の様子を知る上で重要な遺構である。また周辺地域は1970年の万国博覧会を契機に、通称大宮通の幅員拡張、近鉄新大宮駅の設置及び周辺の区画整理事業など都市基盤整備がなされており、近年特に新市街地として未調査のまま開発が著しく進行している地域である点からも注目される。発掘区は用地の西半に設定し、全面的に調査した。これは、坪の中心部分を含む約 $\frac{1}{4}$ を調査したことになる。調査の便宜をはかるため、昭和37年当時の $1/1000$ 地形図を用いて地区割を設定した。これによって当該地は6 AFG-N・O地区となる(fig.4)。

明治20年の地籍図(fig.5)によれば、調査地周辺は水田であり、一部の畦畔に旧条坊の地割痕跡をたどることができる。また、北から南へ向かう不自然な畦畔の形状は、その北を流れる佐保川から続いており、旧河道を示すものと考えられる。調査の結果、遺構面下約60cmで砂層及び砂礫層が厚く堆積しており、元来この地は低湿地であったことがわかった。また、その堆積層中から樹木が多数検出されたが、¹⁴C検査によると今から3500~4000年前のものと判定される。奈良時代の遺構は、その上に堆積した土層に構築されており、検出遺構に建物、堀、井戸、溝等多数がある。坪は奈良時代初頭から平安時代初期にかけて利用されており、遺構の重複関係や出土遺物等から大きく4時期に区分できた。

奈良時代初頭から中頃にかけて坪は南北に分割され、宅地として班給される。特に中頃から後半にかけては、敷地の一部で和同開塙を創造していたらしく、それに関係する遺構、遺物が多数検出された点は注目されよう。奈良時代末期には、この地は1坪の宅地へと変わり、坪の利用として最盛期を示す。平城京廃絶後の平安時代初期も、1坪の利用形態であると思われるが、小規模の建物が散在するに過ぎなくなる。

出土遺物は他の京内遺跡と比べ瓦の出土量が少ない。その他では和同開塙の錢范、甲バリのついたままの鋳放し銭及び工房関係遺物が多数出土したことが特筆される。

なお、発掘区西半に南北に厚く堆積する砂礫層は、前述した北方の畦畔の乱れに関連した中世以降の河川跡と推察される。



fig. 3 周辺航空写真



fig. 4 6AFG地区割図



fig. 5 明治21年地籍図

3. 写真測量

大規模な遺跡の実測には、遺構の養生のために作業が迅速な写真測量が近年利用される機会が多い。写真測量は精度にムラがなく、いつでも撮影時の状況を再現できる利点をもつ。写真測量を行なうには、予め標定点を遺跡に設置して、これを空中から撮影しなければならない。空中撮影の方法は、クレーン、熱気球、ヘリコプター、セスナ機等にカメラを搭載して撮影を行なうものである。それぞれに特性があり、道路や地形等の立地条件によって撮影方法が決定される。

今回の調査では、遺跡の周囲の道路幅が狭く、クレーンを用いた撮影では調査区全域を網羅することが不可能であるため、この方法を採用できなかった。また熱気球による撮影は、一般的に気象条件に左右されやすく、無風が必須の条件であるため、最近ではまっぱらヘリコプターが使用されるようになってきている。ヘリコプターは hovering (空中で静止すること) が可能であるため、都市部でも高度30m程度まで下降が可能である。そのため大縮尺に耐え得る成果品を期待できるし、写真測量による大縮尺の図化も可能である。

これに対してセスナ機の場合、機種によっても差はあるが、空中での速度が140km/hが限度であり、それ以下に速度を落とすと失速して墜落してしまう。そのため都市部における撮影では遺跡に近接することが不可能であり、成果品の縮尺も $\frac{1}{200}$ が限度である。もちろんヘリコプターで撮影した時のような大縮尺の図化も望めない。

今回の調査でも最初はヘリコプターによる空中撮影及び写真測量による図化を行なう予定であったが、撮影時期がちょうど農薬散布期にあたるため、ヘリコプターをチャーターすることができなかつた。そのためセスナ機による空中撮影を実施した。その際には航空写真の縮尺を正確にするために標定点の設定を行なった。この成果品からは遺跡の大縮尺の図化はできないが、遺跡と周辺の土地利用、地形等との関係を把握することができる。

なお遺跡の実測調査には縮尺20分の1の造り方実測を実施した。

以下に撮影日時、撮影時の仕様、及び標定点配置図、一覧表を附載する。

撮影仕様

撮影日時 1979年5月30日

飛行機 セスナU-206C (スーパースカイワゴン)

カメラ ウィルドRC-10 撮影高度 150m

レンズ 151.72mm UAG6061 露出 $\frac{1}{60}$

フィルム コダックWX 絞り 5.6

撮影縮尺 $\frac{1}{6000}$ 变位修正 ヴァイスSC 6V



fig. 6 空中写真撮影

	X	Y	Z
1	-146262.101	-16779.316	65.466
2	-146262.101	-16796.780	65.445
3	-146262.101	-16818.689	65.492
4	-146262.101	-16839.866	65.415
5	-146228.872	-16780.349	65.767
6	-146228.872	-16796.780	64.458
7	-146228.872	-16838.155	65.521
8	-146203.490	-16782.490	65.440
9	-146203.490	-16796.780	64.550
10	-146203.490	-16832.982	64.348

tab. 1 標定点一覧表

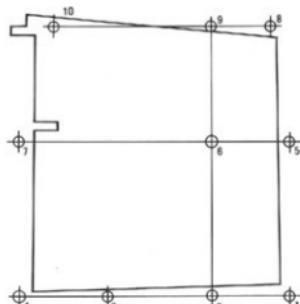


fig. 7 標定点配置図

4. 金属探知機による焼土ピット分布調査

発掘区東寄りに密集して分布する焼土、金属滓等を含むビット群が更に東に分布することが予想されたため、金属探知機による探査を試みた。対象範囲は国土方眼座標でY = -16776.500以東の拡張区の約150mである。この拡張区は、遺構上層の土を東端で約10cm、西端では約30cm残して堆土した状態であった。

探査で使用した装置は、米国ギャレットエレクトロニクス社製のピートフレクエンシオシレータ（マスター・ハンタ）である。探査にあたっては、まず探知機のセンサーを既に検出済の焼土ピットの上約10cmの位置において、このとき感知メーターの指針の振れが最大になり、発振音が変化するように装置を調整した。メーターの目盛りは0~10までであり、焼土ピット直上で10、遺構のない部分で2~3程度の読みを示した。また、測定は1m間隔に南北直線上を探知機が移動する形でおこない、基本的には50cmおきにメーターの読みを記録した。センサーは地表面すれすれの高さに保つようにした。

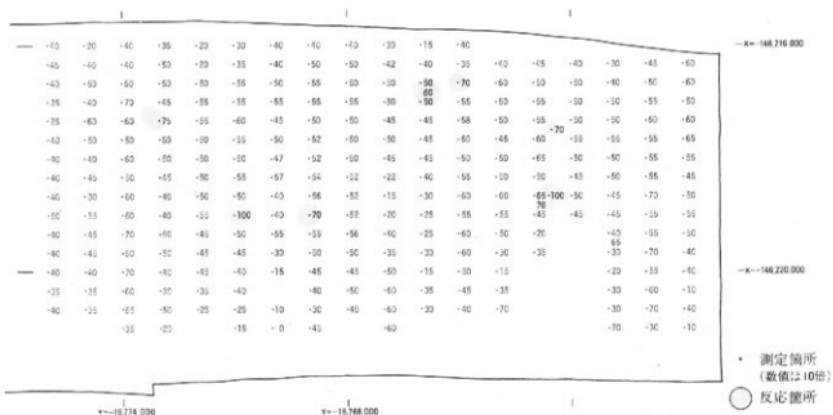
tab. 2 に測定結果を示す。発掘結果とこの測定結果とは思わない一致をみていない。これは、焼土ピット中の金属分がこのような調査対象には少量すぎたこと、探知機のセンサーと遺構のへだたりが大きかったこと、また遺構上面の土層中に廃材等の金属分が多く、その影響が強かったことが主な原因であろう。

今回の調査は、金属探知機を今後の調査に応用していく上で、装置の限界を示すひとつの参考資料としたい。

今回の調査にあたり、帝塚山大学考古学教室所有の金属探知機を使用した。また装備の使用法等について同大学堅田直教授から指導助言を受けた。付記して謝辞としたい。



fig. 8 金属探知機による調査状況



tab. 2 金属探知機による測定結果

II 遺 跡

1. 遺跡の外観

寺内建設予定地は、工場跡地と北側の旧水田とからなる。工場跡地には、約70cmの客土があり、その下に旧水田面が残る。水田の耕土は約20cm、床土は約15cmで、その下に若干の灰褐色粘質土の遺物包含層がある、奈良時代の遺構面となる。

遺構検出面の地層（地山）は、北半部は黄褐色粘質土、南半部は茶褐色粘質土が主体で、整地層は発掘区東寄りの一部に薄く存在するほかはほとんどない。遺構はこれらの土層上面から掘込まれている。遺構検出面の上面の標高は69.40m前後で、旧水田の区画に応じて東北で高く、西南に向うにしたがって段状に低くなっている。

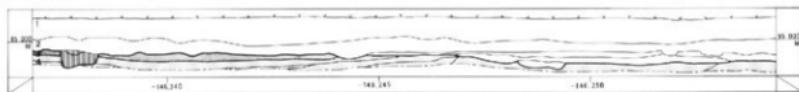
左京三条四坊七坪に構築された遺構は、奈良時代初頭から平安時代初期にわたっており、それらは大きく4時期に区分することができた。七坪は前半の時期（A、B期）は2条の東西溝S D1851及びS D1889によって南北に分割され、その間に坪内道路S F1890の存在をうかがわせる。奈良時代中期から後半にかけての時期（B期）は、坪の南北の宅地内で和同開塗を施した工房がある。後半の時期（C、D期）は、坪は全域すなわち1町分の宅地になる。奈良時代末期（C期）は、大型建物S B1819を中心に多くの建物が整然と配置され、かなり官位が高い貴族の邸宅であったことを思わせる。全時期とも、建物の桁行、梁行寸法が異なるものが多く、建物等の配置にあたって、方眼地割による計画性はみられない。また、瓦の出土量が少ないとからみて、発掘地区には瓦葺の建物はほとんどなかったようである。

なお、遺構検出面下約60cmには発掘区全域にわたって砂礫層が厚く堆積しており、その中に縄文土器片や多数の流木が存在した。

平城京造営以前の遺構としては、発掘区南端中央に弥生土器を含む斜行溝S D1807がある。しかし、平安時代初期以降の遺構は、遺構面が全般的にかなり削平されたためか顯著なものはみあたらない。発掘区西半にみられる中世の河川跡S D1915（PL.14）は、北方を流れる佐保川と関連したものである。これによって、この部分に存在した以前の遺構はすっかり破壊されている。



fig. 9 遺構検出面土層図



1 極土 2 床土 3 整地層 4 自然層

fig.10 発掘区東壁（南側）土層図

2. 遺構

検出した主要遺構は、建物25棟、塀7条、溝5条、井戸2基、土壙などである。和同開珎鑄造関係の土壤S X01-32は次節にまわして、その他については、遺構番号順に解説する。

S B1781(PL. 6): 発掘区東南隅に位置する掘立柱建物。東側の南北柱筋は西側の柱筋と比べて、柱掘形や柱痕跡がひとまわり大きく深いので、この建物は西面廻付の南北棟建物と考えられる。桁行は2間（7尺）以上、梁行は不明で廊の出は8尺である。柱掘形から奈良時代後半の軒丸瓦（6282B型式）が出土。

S D1783: 発掘区東寄りにある南北溝。幅約90cmで、深さは削平のためか約5cmと浅い。暗灰褐色粘質土が堆積し、特に水の流れた跡はみあたらず、敷地を区画する溝と考えられる。奈良時代中頃から後半にかけての土器類が出土。重複関係からこの溝はS B1831より新しく、S B1789及びS B1822より古い。

S B1787(PL. 8): 桁行1間（10尺）以上、梁行2間（9尺等間）の掘立柱の南北棟建物。柱掘形は一辺約90cmの方形で、西北隅及び東・西の側柱筋の北から1間目の掘形に径約25cmの八角形の柱根が残存する。北妻柱筋は、西側にある東西塀S A1798と柱筋が揃うので同時期と思われる。

S B1789(PL. 8): 桁行5間（6尺等間）、梁行2間（6.5尺等間）の掘立柱の南北棟建物。柱掘形は小型で丸味を帯びており、西北隅には直径20cmほどの柱根が残る。北半の掘形は、赤褐色バラスを含む砂疊層に掘り込まれるため、柱痕跡は判然としない。

S A1790(PL. 9): 発掘区南に位置する掘立柱の東西柱列。左右合わせ延16間分検出した。柱間は7尺を基本とする。土壤S K1796の西側の柱掘形は一辺約80cmの方形で整然と並び、直径30cm内外の柱痕跡がよく残る。位置的には、坪の3/4ライン付近にあるが、坪分割すると東西に長い宅地割になるため、敷地を区画する塀と考えられる。

S B1791: 発掘区東端にある南北3間（6尺等間）の掘立柱列。妻柱等は発掘区外にでるため検出しないが、梁行2間（6尺等間）の南北棟だとすると、北側にある建物S B1822と柱筋が揃う。

遺構には一連番号を付して、その前にS A：塗地・櫛・土壙、S B：建物、S C：廊、S D：溝、S K：土壤、S X：その他、などの分類番号を標記する。

遺構の実測は国土方眼座標にしたがい、高さの基準は標高である。

●柱根 ○柱痕跡 ◎柱取抜穴 △柱穴 ▽推定

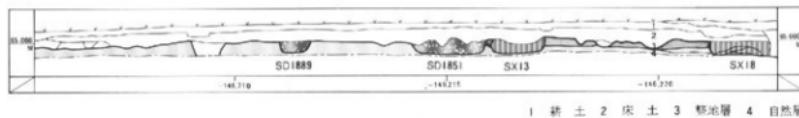
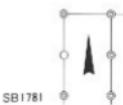


fig.11 発掘区東壁（北側）土層図

S A 1792：東南に隅がくる折れの柱列。東西7間分、南北3間分検出した。柱間寸法は8尺が基本である。東南隅の掘形に柱根が残る。S K1796に関連した目隠塀と思われる。

S A 1793：S A 1792の南にある東西方向の掘立柱列。15間分(6.5尺等間)検出した。東側は南北溝 S D1793の西側で終る。一部の掘形に柱根が残り、他は直径約20cmの柱痕跡が明瞭に残る。東で北にやや振れるが、柱掘形の重複関係から、S B1800、S E1801、S B1813より古く、敷地内を区画する塀と思われる。

S K1796：直径約4mの円形の大土壙で深さ約90cm。東西塀 S A 1790の柱穴を検出しないので、時期はこれより下る。奈良時代中頃から後半の土器類が出上る。井戸跡の可能性もある。

S A 1798：(PL. 9)：発掘区南寄りにある東西柱列。6間分(8尺等間)を検出。柱掘形は方形で整然と並ぶ。一部に柱根が残る。西側にある東西棟建物 S B1813の棟通り筋と揃う。

S A 1799：東西塀 S A 1798の南にある東西方向の柱列。6間分検出。柱掘形及び柱間は一定でないが平均柱間寸法は7尺となる。柱筋は国上方眼に対し東で北に振れており、時期は下ると考えられる。

S B 1800：井戸 S E1801の井戸屋形。柱間寸法は東西11尺、南北10尺と異なる。東南隅柱には、塀 S A 1798が取り付く。西南隅柱の掘形は、擾乱のため検出しない。この隅柱が塀の柱列とずれるのは、建設時期が異なるためであろう。

S E 1801：(PL. 13)：発掘区南寄りにある大型の井戸。井戸掘形は、二段になっている。上段は東西3.9m、南北3.2m、深さ0.6mで、下段はこの東寄りに掘られ、一辺2.2m、深さ0.5mの正方形である。井戸枠は井籠組で、下部の4段が残存する。井戸枠内径は東西1.6m、南北1.63mある。板厚は約6cm、材種は檜である。この井戸から奈良時代末の土器類が出土し、廃絶の時期はこの頃と思われる。

S B 1812：桁行3間(7尺等間)、梁行1間(12尺)の掘立柱の東西棟建物。東妻柱はなく、西妻柱の掘形はやや小型で柱痕跡がない。側柱の掘形には、直径25cmほどの柱痕跡が明瞭に残る。柱掘形の切り合い関係から塀 S A 1790より新しいことがわかる。

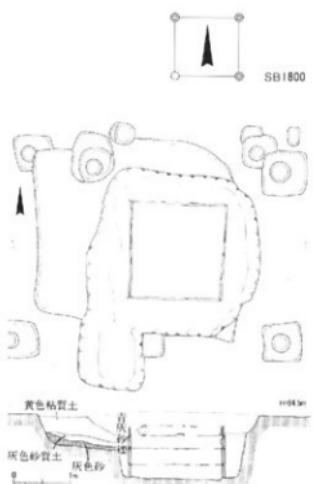


fig.12 S E1801実測図

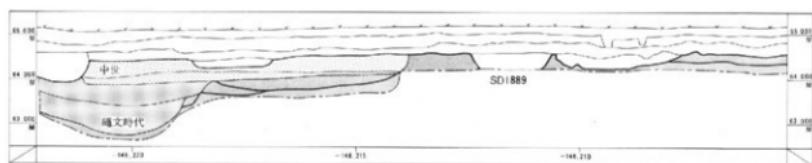


fig.13 発掘区西壁上層図

S B1813(PL. 7)：発掘区西南に位置する掘立柱の東西棟建物。桁行5間のうち中央間が10尺、脇間、端間は8尺等間で、梁行は2間(8尺等間)。柱掘形は方形で整然と並び、各々直径30cmほどの柱筋跡が明瞭に残る。桁行中央間のみ柱間寸法が10尺と広いのは、北側にある大型建物S B1817の桁行中央間に合わせたものと考えられる。東妻柱の柱痕跡下には礎盤にあてた木片が残存する。柱掘形の切り合ひ関係から東西垢S A1783より新しいことがわかる。

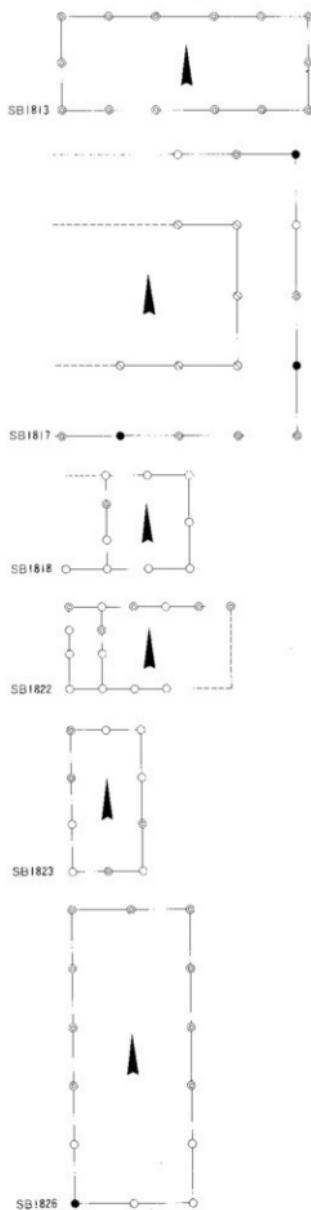
S B1817(PL. 7)：東西2間以上(10尺等間)、南北2間(12尺等間)の身舎の、東・南・北の三面に扉が取り付く掘立柱の建物。廟の出は東10尺、南・北12尺と幅広くなる。西半部分は中世の河川跡S D 1915に擾乱されているが、建物の規模や坪内の位置から考えて、桁行5間、梁間2間、四面廻付の東西棟建物と思われる。身舎柱の掘形には柱抜き取り穴があるが、隅柱及び妻柱を外側(東側)に抜き取るのに対し、他は内側に抜き取っている。側柱の柱掘形は、身舎のものと比べるとやや小さく、直径30cmほどの柱根が残るものもある。柱掘形の深さは、遺構検出面から深いもので約60cmしかないのでは、遺構面は後世大幅に削平されたことをうかがわせる。

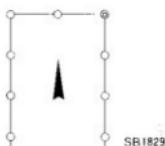
S B1818：桁行3間以上(7尺等間)、梁行2間(8尺等間)の掘立柱の東西棟建物。東から2間目の柱筋にある2つの柱穴は間仕切りと考えられる。西半は河川跡S D 1915による擾乱をうけ失なわれている。東妻柱穴は、大型建物S B1817の柱掘形に切られるので、この建物のほうが時期は古い。

S B1822：桁行5間(5.5尺等間)、梁行3間(延べ14尺)の掘立柱の東西棟建物。西妻は後世の擾乱で失なわれ、東半は発掘区外に出るために詳細は不明である。西から2間目の南北方向の柱筋は、北2間の柱間は4尺等間、南1間は6尺と広い。

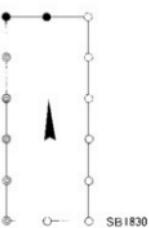
S B1823：桁行3間(8尺等間)、梁行2間(平均6尺)の掘立柱の南北棟建物。妻柱の位置がややずれる。柱掘形は全体的に小さい。建物S B1826とは、東側柱北から1間目が切り合うが、それほど明瞭でない。東北隅柱穴を検出しなかったことから、この建物のほうが時期は古いと考えられる。

S B1826(PL. 7)：発掘区中央東寄りにある桁行5間(10尺等間)、梁行2間(10尺等間)の掘立柱の南北棟建物。柱掘形は一辺約1mで比較的大きい。西南隅柱穴に柱根と礎盤が残り、南妻柱の掘形では、遺構検出面からわずか数センチメートル下に礎盤が残る。南妻柱筋は西側の大型建物S B1817の北側柱筋と揃う。全体の建物配置から考えて、これと同時期と思われる。なお、一部の柱掘形の埋土から奈良時代末期に属する土器類が出土した。

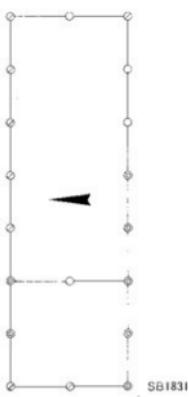




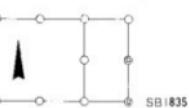
S B 1829(PL. 8)：発掘区東端にある掘立柱の南北棟建物。桁行3間以上(7尺等間)、梁行2間(8尺等間)で南北は発掘区外へ出る。掘形は全体的に小さい。東北隅柱の掘形には柱痕跡が明瞭に残っていた。その他は南北に長い柱抜き取り穴があり、この埋土にるつは断片、銅津、焼土等が混じるものがある。したがって建設時期は、和同開珎造期(二期)より以降には下らない。



S B 1830(PL. 8)：桁行5間(7尺等間)、梁行2間(7尺等間)の掘立柱の南北棟建物。西側柱筋の柱掘形は一辺約60cmの方形で、柱痕跡が明瞭に残る。東側柱筋は発掘区外となるが、発掘区東壁断面土層から南北二分の柱穴が検出された。西北隅及び北妻の柱掘形には、焼土が混じり直径約20cmの柱根が残存する。この建物の建設時期はB期を下るものと考えられる。



S B 1831(PL. 5)：桁行7間(9尺等間)、梁行2間(10尺等間)の掘立柱の東西棟建物。西から2間目の建物内部の柱掘形は間仕切柱のものと思われる。柱掘形は一辺 1.5m を越えており、この発掘区内では大きい方に属する。柱抜き取り穴があるものが多く、いずれも建物の外側を向いている。北側柱東から1、2間目の柱抜取穴は、焼土で埋まり、和同開珎造に関係したと思われる工具類の断片や鐵範も混じっている。特に東から1間目では柱掘形内部にも焼土ピットは掘られており、重複する他の建物との柱穴の切り合いから考えても、この建物は最も古いもののと思われる。



S B 1835：発掘区中央にある桁行4間(7.5尺等間)、梁行2間(7尺等間)の掘立柱の東西棟建物。東から1間目に間仕切がある。柱穴は全体的に小さく、東寄りには人頭大から拳大の足固め石が残るものが多い。S B 1831とは東妻柱の柱穴の切り合いから、この建物の方が新しいことがわかる。

S B 1836：発掘区東端に位置する掘立柱の東西棟建物。北側柱の4間(8尺等間)のみ柱掘形は明瞭で、3ヶ所に柱根が残る。東妻柱穴は、東北隅柱から9~10尺南の位置にわずかにかかる。西端部は中世の擾乱で失なわれ、南側柱筋は発掘区外となるため規格は不明であるが、桁行は6間以上にならない。北側柱筋は西方のS B 1826の北妻柱筋と揃うので、これと同時期のものと考えられる。

S A 1838：8尺等間の東西柱列。4間分検出した(調査終了後の立会調査で東へ延びることを確認)柱筋は、南北棟 S B 1830の北妻柱筋と揃うので、これと同時期のものと考えられる。

S X 1842：発掘区東北で検出された小石留りの小穴群。直径60cmほどの石留りが散在するが、穴の掘形の輪郭は明瞭でない。遺構の性格はいまのところ不明である。

S K1847：直径約80cm、深さ約20cmの土壙。平安時代前期に属する土器類及び奈良時代後半の軒丸瓦（6282D型式）が出土。

S K1848：直径約1m、深さ約30cmの土壙。平安時代前期に属する土器類が出土。

S K1849：発掘区東側で検出された浅い土壙状の窪みで、製塩土器がまとまって出土。

S D1851(PL.10)：坪を南北に二分する位置に掘られた東西溝。東側は遺存状態がよく、発掘区東端でも確認する。溝幅は1~2mとばらつき、深さは20cm内外と浅い。溝の埋土は茶褐色砂質土で、焼土もわずかに混る。奈良時代中頃から後半の土器類が出土。平城京造営当初から奈良時代後半まで存続すると考えられる。

S D1889(PL.10)：S D1851の北にある東西溝。遺存状態は良くなく、溝幅も0.5~1.5mと一定せず、深さは20cm内外である。奈良時代中頃から後半の土器類が出土。

S F1890(PL.10)：S D1851、S D1889の間にある。両溝が存続する時期は、ここに他の遺構はみあたらないので、坪内を通る小路で両溝はその側溝と推定される。道幅は溝心々で平均3.6mである。

S B1891(PL.8)：発掘区東北にある掘立柱の東西棟建物。桁行6間以上(8尺等間)、梁行2間(8.5尺等間)。東端は発掘区外である。西から3間に間仕切が付く。柱掘形は柱抜き取り穴と重なり南北に長いものが多い。南側柱筋の柱掘形は東西溝S D1889の埋土に掘込まれるため、建設時期は溝廃絶後と考えられる。

S D1892：発掘区東北にある南北溝。幅1.5m、深さ20cmほどで、南端は中世の擾乱で明らかでないが、東西溝S D1889に統くと考えられる。この溝は坪の北半を東西に二分する位置にあたる可能性もあるので、検討を要する。廃絶の時期は出土遺物から奈良時代後半頃と推定される。

S B1893：桁行4間(6尺等間)、梁行1間以上(6尺)の掘立柱の東西棟建物。北側柱筋は発掘区外である。西妻柱筋の柱穴は南北溝S D1892の埋土に掘込まれるため、これより時期は新しい。

S A1896：S B1893の西側にある南北の柱列。2間分(8尺等間)検出した。2ヶ所にやせた柱根が残存する。時期は不明。

S E1898(PL.13)：発掘区北側中央にある井戸。井戸の掘形は、東西3.3m、南北2mの矩形をしており、井戸枠のある西半部分のみ更に掘り込んでいる。深さは西側で約90cmと浅い。井戸枠は、縦板組で内径で東西1.35m、南北1.2mあり内側に枠本をあて支持する。枠板は下部の約30cmが残存する。掘形、井戸枠とともに、西やや北に振れる。井戸埋土から奈良時代末期の土器類が出土。

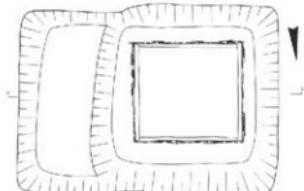
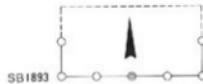
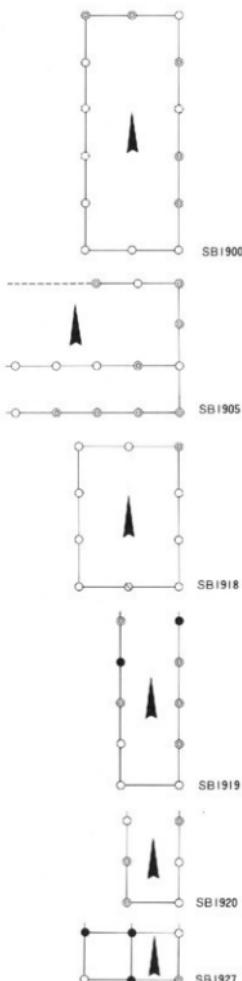


fig.14 S E1898実測図



S B1900(PL. 5): 発掘区中央にある桁行5間(8尺等間)、梁行2間(8尺等間)の掘立柱の南北棟建物。柱掘形は小さく円形に近いものが多い。柱穴の切り合からS B1817より古く、北妻柱筋がS B1831の南側柱筋とほぼ揃うのでこれと同時期と考えられる。

S B1905(PL. 6): 桁行4間以上(7尺等間)、梁行2間(7尺等間)南廂付(8尺)の掘立柱の東西棟建物。西端は擾乱で失なわれる。S B1835と重複するが新旧は不明である。全体の配置からこの建物のほうを古く考えたい。

S D1912: 発掘区北にある南北溝。幅約1.5m、深さ約20cmで南端は東西溝S D1891に続く。奈良時代中頃から後半にかけての土器類が出土しており、廃絶はこの頃と考えられる。

S A1913: 井戸S E1898の北にある東西に並ぶ柱列。4間分検出しが、柱間は一定でなく、柱筋も東でやや北に振れる。時期不明。

S B1918(PL. 5): 発掘区西北にある桁行3間(8尺等間)、梁行2間(8.5尺等間)の掘立柱の南北棟建物。東北隅柱の掘形が直径15cmの柱痕跡が明瞭に残る。南妻柱の掘形は小さいながら、西向きの柱抜き取り穴がある。

S B1919(PL. 5): 桁行4間以上(7尺等間)、梁行1間(10尺)の掘立柱の南北棟建物。柱掘形は一辺約60cmで小さいが、整然とならぶ。一部に柱根及び柱痕跡が残る。南端の柱穴は東西溝S D1889の埋土の上に掘込まれるので、この溝の廃絶後に建てられたことがわかる。

S B1920(PL. 5): S B1919の北側にある桁行2間以上(7尺等間)、梁行1間(9尺)の掘立柱の南北棟建物。北半は発掘区外へてる。

S B1919とは重なり合うが、柱穴の切り合からこの建物のほうが新しいことがわかる。

S B1927: 東西2間(8尺等間)、南北1間以上(8尺)の掘立柱の建物。北半は発掘区外であり、今は確認しなかったが、規模から考えて純柱の倉庫になる可能性がある。3ヶ所の柱穴にやせた柱根が残る。建物の方向は、東でやや南に振れる。柱穴の検出層位から考えて、古い時期の建物であると思われる。

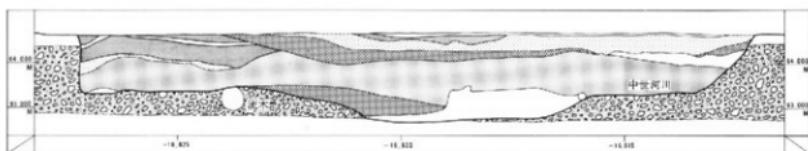


fig.15 中世河川 S D1915 土層図

3. 焼土ピット（PL 11・12）

調査区の東北部分で焼土のつまたったピット群を検出した。このピット群の拡がりは、当初に設定した調査区域の外に延びることが予想されたため、2度にわたって調査区の拡張を行なった。その結果fig.17に示すように東西20m、南北15mの範囲に密集した焼土ピットを、総数で31基検出した。しかし、この範囲には現代と中世の大規模な擾乱による破壊がみられるので、焼土ピットの実数はさらに多かったものとみられる。焼土ピットの拡がりは、A・B期のS D1851を北限とし、南はB₁期の南北棟建物S B1829の柱抜取穴にも焼土の投棄が観察できた。焼土ピットは、検出順に通し番号を付して遺構と遺物を登録したが、そのうちS X05、06は土壤の形をなさず、整地面に投棄されたものである。

これらのピットの平面形は、大きいもので190×90cm、小さいもので35×53cmを測るが、いずれも隅丸方形の掘形を呈する。焼土ピットのなかには、たがいに切り合うものがあって、すべてのピットが同時に掘り込まれたものではない。また局的に残っていた整地土を境にして、上下両面で遺構を検出しているので、こうしたピット群の形成は決して単期間によるものではない。S X08 B、16、25、26、28は切り合いと検出層から古くさかのばることが確定なピットで、遺構変遷B₁期に対応するものであろう。またS X13、14、15、18、21、22は整地土の上面から掘られており、B₁期にあてられる。S X01、08 A、23もB₁期に対応するとみられる。しかし、これらのピット内の埋土から出土した土器、須恵器のうち年代の判明するものは、すべて平城宮の上器編年で第III期(天平末年頃)に相当する。またS X16を除いて、掘形の平面形の長・短軸は、平城京の地割の方向とおおむね一致している。

ピット内の埋土の状況は、橙赤色の焼土だけからなるものもあるが、炭、赤褐色砂質土、灰褐色砂質土、灰褐色粘質土が明瞭に層界をなして堆積するものが多い(fig.16)。一辺が100cmを超える大型の土壤(S X13、15、18など)のなかには、灰褐色砂質土、灰褐色粘質土が水平に堆積し、粘質土中にはおそらく燃料とみられる生焼けの木片が模片とともに多量に混っていた。一方、一辺が100cm以下の小型のピットでは、燃料残片を含む粘質土はみあたらず、ピットの性格に相違のあったことをうかがわせる。しかし、いずれのピットの壁面と基底部にも加熱された痕跡はみうけられなかった。

ピット内の埋土からは、土器、須恵器のほか、るつぼ、ふいごの羽口、鐵范、銅津などが出土した。とりわけ橙赤色の焼土層からは、大小の鐵范の断片が多量に出土している。鐵范は、和同開珎の一種に限られる。S X13からは、和同錢がるっぽに付着した状態で出土した。またS X14、17からは鑄放しの状態のままの和同錢を検出した。S X15から、10cm大の赤く焼けた筋入りの粘土ブロックが数個出土したが、土壤の壁に付着した状態ではなく、遊離した状態で採集された。これらは本米、炉壁の一部をなしていたとみられる。

以上の焼土ピット群は、鋳造炉の本体の基礎地業とは断定できないにせよ、和同開珎を鋳造する鋳工房に附属するピット群であることは間違いないなく、しかも銅錢の工程で生じた廃棄物によって埋め立てられたものである。これらのピット群がS D1851以北には拡がらないところからみて、鋳工房は七坪を折半した南北部を占めていたことがうかがえる。また、この銅錢の年代も出土土器から推定して奈良時代中頃から後半にかけての時期に求めることができる。

広島大学教授瀬見浩氏から、焼土ピットに関して、貴重な助言を頂戴した。付記して謝辞としたい。

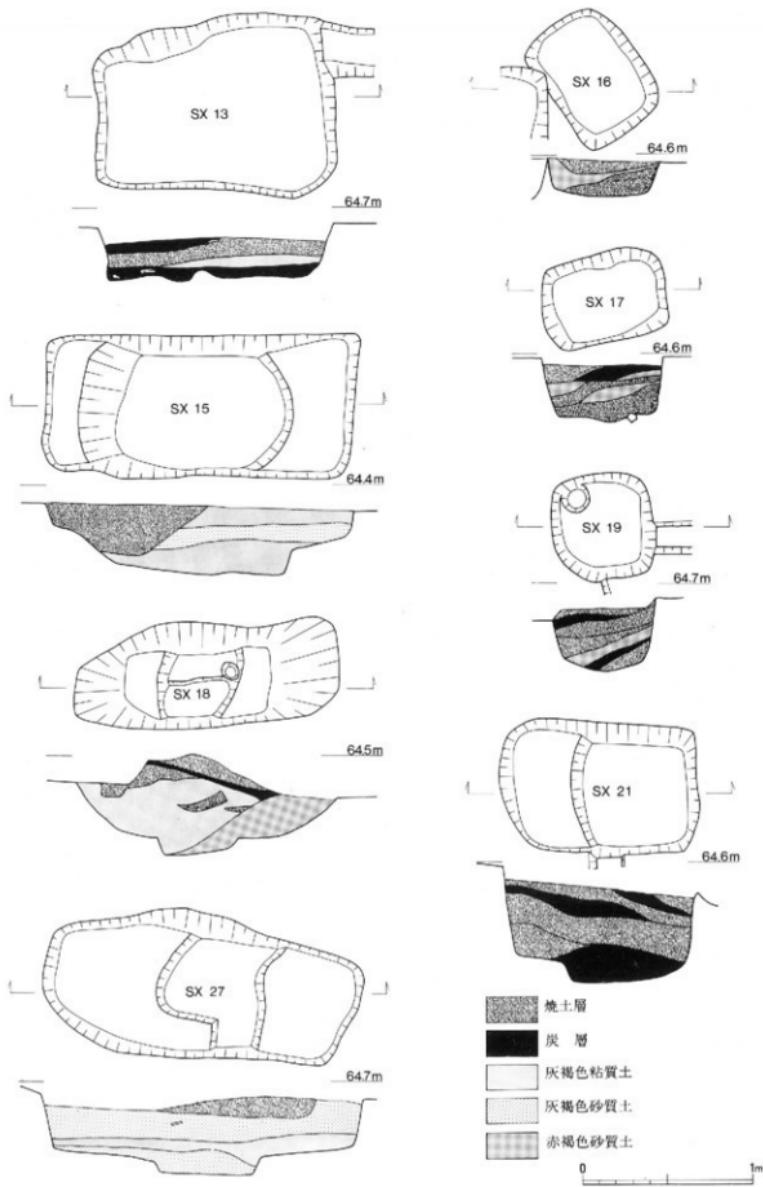


fig.16 焼上ビット実測図

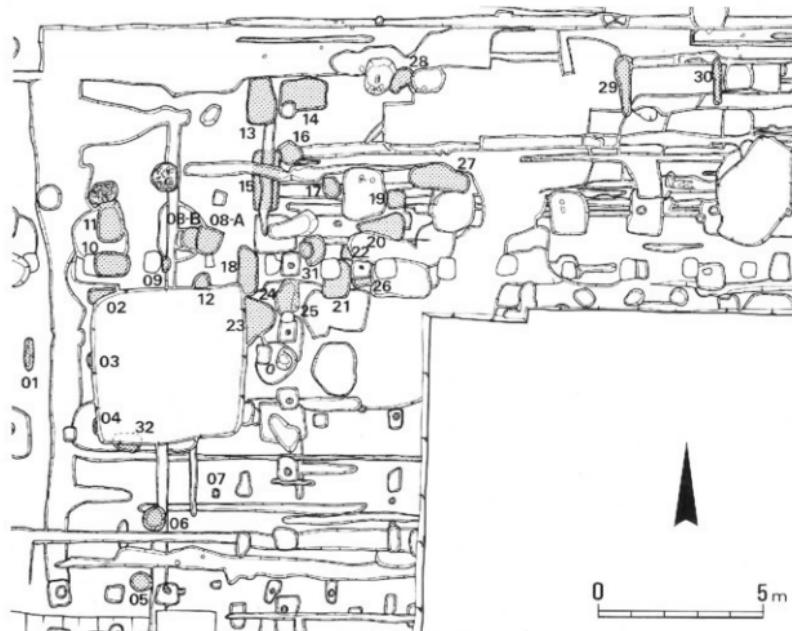


fig.17 燃土ピット分布図

燃土ピットの遺構番号	寸法(cm) 東西×南北×深さ	調査関係の遺物	土器の時期	燃土ピットの遺構番号	寸法(cm) 東西×南北×深さ	調査関係の遺物	土器の時期
SX01	30×100×10	銅津	III	SX17	51×75×30	和同銭・鉄范・銅板片	
SX02	(90×60×30)	鉄范・るつぼ・銅津	III	SX18	60×155×60	鉄范・るつぼ・銅津 ふいごの羽口	III
SX03	(15×85×20)			SX19	60×60×40	鉄范・るつぼ	
SX04	(17×37×16)		III	SX20	(170×80×40)	鉄范・銅棒・ふいごの羽口	III
SX05	直(67)×10			SX21	80×115×70	和同銭・鉄范・るつぼ	
SX06	直(68)×40	鉄范・銅片・るつぼ・銅津		SX22	40×45×10	るつぼ・ふいごの羽口	
SX07	52×45×10	銅津		SX23	130×150×30	和同銭・鉄范・るつぼ・銅津	III
SX08A	80×70×20	鉄范・るつぼ・ふいごの羽口	III	SX24	(45×7×20)	ふいごの羽口	
SX08B	75×70×20	鉄范・ふいごの羽口	III	SX25	(45×60×10)	和同銭・鉄范・るつぼ ふいごの羽口	
SX09	35×53×10			SX26	30×75×10	ふいごの羽口	
SX10	110×80×20		III	SX27	190×90×50	鉄范・るつぼ・ふいごの羽口	III
SX11	65×110×40		III	SX28	(60×60×30)	ふいごの羽口	
SX12	(55×56×20)	ふいごの羽口		SX29	165×35×40	鉄范・銅津・ふいごの羽口	
SX13	105×143×30	和同銭・鉄范・るつぼ・銅津 ふいごの羽口	III	SX30	30×150×30	鉄范・るつぼ・銅津 ふいごの羽口	
SX14	135×104×50	和同銭・鉄范・るつぼ・銅津 ふいごの羽口	III	SX31	60×85×20	和同銭・鉄范・ふいごの羽口	III
SX15	84×18×40	鉄范・るつぼ・銅津 ふいごの羽口	III	SX32	(85×35×40)	和同銭・鉄范	III
SX16	58×76×20		III			カッコは復原による参考値。	

tab. 3 燃土ピット一覧表



fig.18 七坪の占地

地点名	X	Y	備考
東一坊 大路心	-145757.263	-18054.064	39次調査 実測直
二条兼間 大路心	-145751.977	-18027.326	*
二坊坊間 小路心	-146192.580	-17653.825	86次調査 実測直
朱雀門心	-145994.500	-18586.320	16次調査 実測直

tab. 4 計測座標表

4. 占地と時期区分

1. 占地

左京三条四坊七坪を囲む条坊路の正確な位置・幅員等は、今のところ明らかでない。今回の調査区は坪内であるため、検出した奈良時代の遺構が坪内に占める位置は正確にはわからない。表 tab. 4は、これまでの発掘成果で明らかとなった条坊の交点の座標である。また国土地理院基盤図に対し、朱雀大路は N15°41' W、二条大路ま E 4° N ~ E 11° N 振れていることが確認されている。これらをもとに京の条坊計画（1800尺の方眼地割）に基づいて 1 尺 = 0.295m として計算すると、七坪を囲む条坊路の幅員を全て同じとした場合に、坪の中心線は東西方向が 4' の振れで東西溝 S D1851, 11' の振れで東西溝 S D1889 を通る。また南北方向は、南北溝 S D1889 を通る。この 2 条の東西溝間は坪内の小路 S F1890 と考えられるので、この小路が坪を南北に分割する施設であると推定できる。したがって、これらの遺構が存在する奈良時代後半までは、南が 1/2 坪、北は更に 1/2 坪を少なくとも東西に二分する利用であったと考えられる。

2. 時期区分

今回の調査で検出した遺構は多岐にわたっており、他の調査済の京内遺跡と比べても決して少なくない。そのうちで出土遺物から建設時期が限定される遺構は全体の 2 割ほどである。したがって、時期区分は、これを基本に建物の重複関係、配置状況等によって決定した。その結果、奈良時代初頭から平安時代初期にかけて、大きく 4 時期に区分することができる。

A期(奈良時代初頭): 建物 3 棟、塀 1 条、溝 4 条、道路 1 箍が主な遺構である。七坪は、坪内の小路 S F1890 によって南北に分割される。南北 1/2 坪は建物 2 棟、塀 1 条で構成される。東西棟建物 S B1831 を中心に、柱筋をほぼ揃えて南北棟建物 S B1900 が西側に配され、南方には、敷地を区画する塀 S A1790 が設けられる。東西棟建物 S B1831 の位置は、間仕切柱筋が坪の南北中心線にのり、北側柱筋は東西溝 S D1851 の溝口から南へ 20 尺である。東西塀 S A1790 は、坪の東西中心線から南へ 120 尺にある。しかし、敷地内の建物等の配置や柱間寸法に特に計画性はみられない。北 1/2 坪の構成については明らかでない。南北溝 S D1892 を宅地割の溝とすれば北半は更に二分されることになる。発掘区西北に南北棟建物 S B1918 が建つ。

B期(奈良時代中頃～後半): 坪割は、A期を踏襲している。この時期の建物は柱間寸法が 7 ~ 8 尺と比較的小さいのが特徴である。南北 1/2 坪では一部に建てかえや新設があったと考えられるので、前半を B₁、後半を B₂ と区分する。

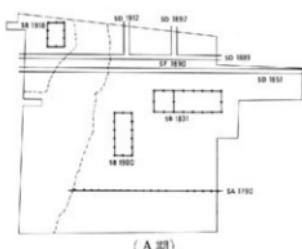


fig.19 七坪変遷図(I)

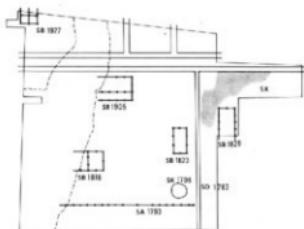
まず、B₁期に南北坪は南面付東西棟建物S B1905を中心に建物4棟、塀1条、土壤1、溝1条それに和同開跡鑄造関係遺構からなる。東西塀S A1793と南北溝S D1783で囲まれる一部は、中心区画をなすと思われる。この区画の東南隅には井戸跡と推定される大型土壤S K1796がある。東西塀S A1793は、坪の南北中心線上にあるが全般的な配置関係に計画性はみられない。東側の区画は、和同開跡の鑄造に関係したと思われる土壤群が東西約20m、南北約15mの範囲に分布する。この土壤の埋土には、炭化物、灰、焼土等が層状に堆積しているものもある。しかし、土壤周辺の地山層が焼けていないため、これが直ちに炉であるとは断定できない。この区画に建つ南北棟S B1829は、北でやや東に振れており、柱穴も大きくなりが、工房に関係する雑舎であると考えられる。

B₂期になると、南北溝S D1783、東西塀S A1793を廃絶して、鍵型の塀S A1792が目隠塀として新たに設置される。また南北棟建物S B1829に替わって東西棟建物S B1822が建つ。その南に南北棟建物S B1791及び西廻付南北棟S B1781が建つ。鉄鉄関係遺構の土壤群はこの時期も存在する。

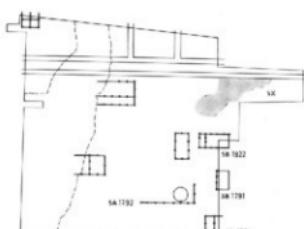
南北坪の坪割は、A期と変らず発掘区西北ではS B1918に変わり倉庫と思われる建物S B1927が建つ。

C期(奈良時代末期)：この時期には、坪割の小路及び備溝は廃絶し、七坪は全域すなわち1町分の利用に変わる。遺構には、建物8棟、井戸2基、塀1条がある。この時期の建物は全般的に規模が大きく、整然と配置するのが特徴である。坪の西南にある四面廻付の東西棟建物S B1817を中心に、南側に中央間の柱間をこれと揃えた東西棟建物S B1813(棟心間で60尺)が、また東側に南妻柱筋をS B1817の北側柱筋に揃えた南北棟建物S B1826が建つ。S B1813の東方には、東西塀S A1798及び南北棟建物S B1787が柱筋を揃えて建ち並ぶ。これら中心部分を構成する建物の配置は計画的である。これに対して、北側に建つ東西棟建物S B1891及び南北棟建物S B1919は、中心部分の配置計画とは直接関係していない雑舎である。長岡京へ遷都とともにこれらの建物は取り壊され、井戸2基S E1801及びS E1898も廃絶されたようである。

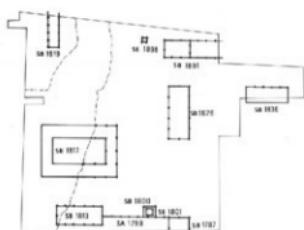
D期(平安時代初期)：平城上皇による平城京還都計画に対応する時期と考えられる。七坪は1町分の利用がなされたようで、建物6棟、塀2条から構成される。しかし、坪の中心付近に建つ東西棟建物S B1835をはじめ各建物の規模は、全般的に小さい。また、それらの配置も計画性にやや乏しいものとなっている。



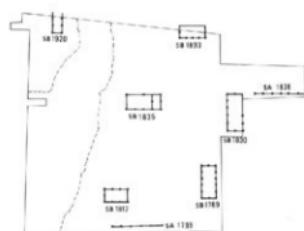
B₁期



B₂期



C期



D期

fig.20 七坪変遷図(II)

III. 遺物

1. 瓦 (PL.16)

瓦は、発掘区全体から出土した。軒瓦は总数で21個であり、1aあたりの出土量は0.8個である(河川部を除く)。

(註)

軒丸瓦(fig.21) 6018B、6231B、6282B、D、F、6301Bの各型式が出土した。6282Bが2個の他は、どれも1個体の出土である。

軒平瓦(fig.22) 軒平瓦は何れも小片のみ。6661、6721、6732、6760Aが出土した。6661が3個体の他は、各1個体である。

以上の資料のうち、6661はいわゆる大官大寺式、I期に編年。6282、6721は大膳式様式の組み合せで、III期に相当する。

遺構に伴った例は以下の通り; 6282DがD期のS K1847の埋土。6282BがC期の井戸S E1898の掘形埋土。6760AがC期の井戸S E1801埋土。6301BがA、B₁、B₂期の溝S D1889。6721がB期の土壙S K1796の埋土。他は整地土からの出土である。その他、巴文軒瓦が中世の河川堆積層から出土した。

(註) 軒瓦の型式と編年に関しては、奈良国立文化財研究所で設定した型式番号と平成宮瓦編年を用いる。

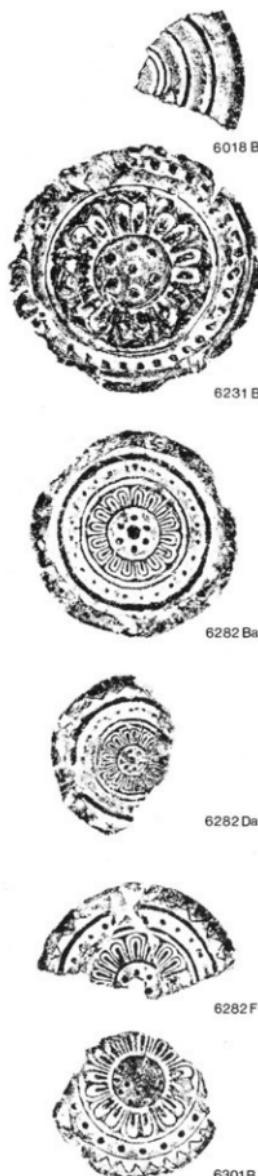


fig.21 軒丸瓦



fig.22 軒平瓦

2. 土器 (PL.17・PL.18)

土器類は調査区全域から、多量の土師器・須恵器の他、黒色土器、綠釉陶器、灰釉陶器、製塙土器が出土した。この他、満 S D1807から弥生土器、旧河川 S D1915下の流木付近および調査区西北部の土壤から後期前葉頃の縄文土器 (fig.23) が出土した。以下に述べる遺構から出土した土器類の年代は、焼上ピット群出土土器が奈良時代中頃、土壤 S K1796出土土器は奈良時代中頃～後半、井戸 S E1801・S E1898出土土器は奈良時代末、土壤 S K1847・S K1848出土土器は平安時代前期に属する。

焼土ピット群出土土器 (fig.24) 土師器杯A・杯B・皿A・皿B・高杯・鉢B・壺B・盤、須恵器杯A・杯B・皿B・蓋・壺Q・鉢D・甕がある(註)。

土師器 杯A(1・3)は口縁部を横なでし、底部外面をヘラ削りする。1は口縁部外面を粗くヘラ磨きし、内面に螺旋・斜放射、連弧暗文がある。3は螺旋・斜放射暗文がある。杯C(2)は口縁端部に内傾する面をもつ。口縁部を横なでし、底部外面は不調整である。螺旋・斜放射暗文がある。皿A(9)は口縁部を横なでし、底部外面はヘラ削りする。皿B(10)は低い高台がつく。螺旋・斜放射暗文がある。鉢B(13)は口縁部が内湾する。口縁部外面上半は横なで、それ以下はヘラ削りし、上半は粗いヘラ磨きを施す。壺B(11)は口縁部を横なでし、体部外面は不調整である。甕A(12)は体部外面に斜方向のハケメを施す。

須恵器 杯A(6)は底部外面がヘラ切りのままである。杯B(5・8)は外方に張る低い高台がつく。蓋(4・7)は笠形で、頂部をヘラ削りする。壺Q(14)は外反する長い口縁部と肩の張る体部からなり、高台がつく。体部下半を粗くヘラ削りする。

S K1796出土土器 (fig.24) 土師器杯A・杯B・皿A・椀A・蓋・高杯・甕A、須恵器杯A・杯B・皿A・皿B・蓋・高杯・盤・甕がある。

土師器 杯A(15)は口縁部を横なでし、底部外面をヘラ削りする。斜放射暗文がある。皿A(17)は口縁端部が巻き込む。口縁部を横なでし、底部外面をヘラ削りする。椀A(16)は外面不調整で、粗いヘラ磨きを施す。甕A(21)は体部内面に横方向のハケメを施す。

須恵器 杯A(18~20)は底部外面ヘラ切りのままである。杯B(24・25)は底部外面ヘラ切りのままで、24は口縁部下半をヘラ削りする。25の口縁部外面には「造仏」の墨書がある。蓋(22・23)は笠形で、23は頂部外面をヘラ削りする。皿A(26)は外反する短い口縁部がつく。底部外面はヘラ切りのままである。皿B(27・28)は底部外面をヘラ削りする。28の底部外面に「左」、「別女」の墨書がある。鉢D(29)は体部下半から底部をヘラ削りする。

S E1801出土土器 (fig.26) 土師器杯A・杯B・椀A・皿・蓋・高杯・壺E・甕、須恵器杯・皿・鉢F・甕がある。

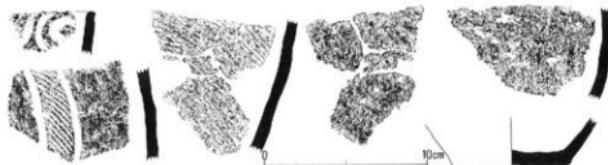


fig.23 縄文土器

焼土ピット群出土土器

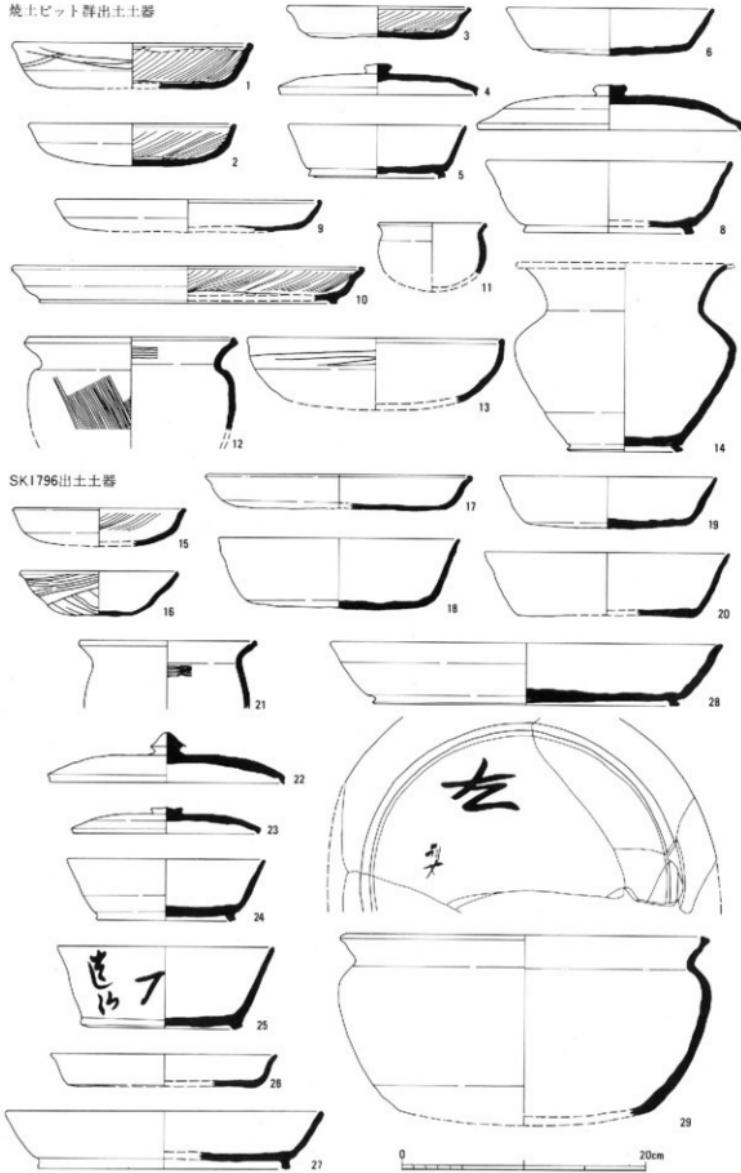


fig.24 焼土ピット群・SK1796出土土器

土師器 杯A(32)は口縁部を横なでし、底部外面は不調整である。杯B(34・35)は口縁部外面をヘラ削りし、ヘラ磨きを施す。35は口縁部内面の上部に3段、下部に1段の連弧暗文、底部内面には全面に細かい螺旋暗文がある。椀A(30・31)は口縁部外面上部を横なでし、それ以下をヘラ削りするもの(31)と、不調整のもの(30)とがある。壺E(33)は小形の広口壺で、体部外面をヘラ削りし、粗いヘラ磨きを施す。

S E 1898出土土器 (fig.26) 土師器杯A・椀A・蓋・甕、須恵器杯A・杯B・皿C・蓋・壺・甕、綠釉陶器椀、製塙土器がある。

土師器 杯A(40)は口縁部外面上部を横なでし、それ以下はヘラ削りする。椀A(36・37)は内面を横なでし、外面はヘラ削りする。蓋(39)は平らな頂部となだらかに湾曲する縁部からなる。頂部にはヘラ磨きが残る。

須恵器 杯B(41・43・44)は口縁部がわずかに外反する。底部外面はなでを施すもの(43)と、ヘラ切りのままのもの(41・44)とがある。皿C(38)は短い口縁部がつく。底部外面はヘラ切りのままである。蓋(42)は縁部が屈曲する。頂部外面はヘラ切りのままである。

S K 1848出土土器 (fig.26) 土師器杯A・杯B・皿A・椀A・甕、黒色土器杯、綠釉陶器がある。

土師器 杯A(50・51)は口縁部外面をヘラ削りする。杯B(49・53)は口縁部外面をヘラ削りする。皿A(47・48・52)は外面をヘラ削りする。52の底部外面には、焼成後につけた「×」の線刻がある。椀A(45・46)は外面をヘラ削りする。46は口縁端部に煤が付着している。甕A(54)は口縁部・体部内面は横なです。体部外面に斜方向の叩き目がある。

S K 1847出土土器 (fig.26) 土師器杯A・杯B・皿A・椀A・甕、須恵器杯B・蓋、黒色土器杯A、製塙土器がある。

土師器 杯A(55)は口縁部外面上部を強く横なでし、それ以下は不調整である。杯B(63)は大形のもので、口縁部外面をヘラ削りし、粗くヘラ磨きを施す。皿A(56・57)は口縁部が内湾するもの(56)と、やや外反するもの(57)とがある。椀A(60)は口縁部外面上部を横なでし、それ以下は不調整である。

須恵器 蓋(59・61・62)には、杯B蓋(59・61)と、壺蓋(62)とがある。61の内面は平滑で墨が付着する。

黒色土器 杯A(58)は内面黒色のもので、口縁端部がわずかに外反する。口縁部外面は上部を横なでし、それ以下はヘラ削りの後、粗くヘラ削りする。内面はヘラ磨きを施す。

S K 1849出土製塙土器 (fig.25) 保存状態はよくない。胎土は砂粒を多量に含む。口縁部は内湾し、底部は尖底である。口縁端部に小さい刻み目を付けたものがある。

(註) 器種分類については、「平城宮発掘調査報告書」に従う。

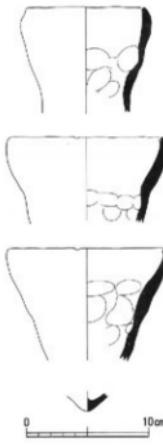
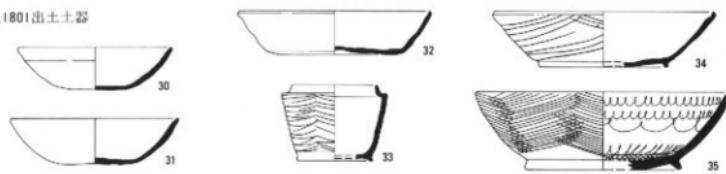
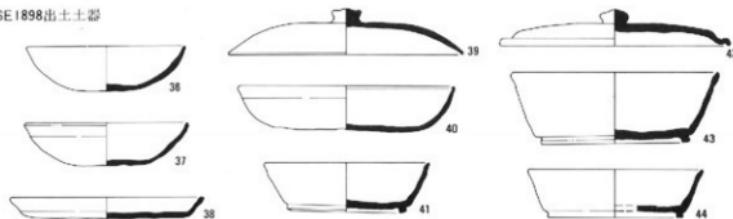


fig.25 製塙土器

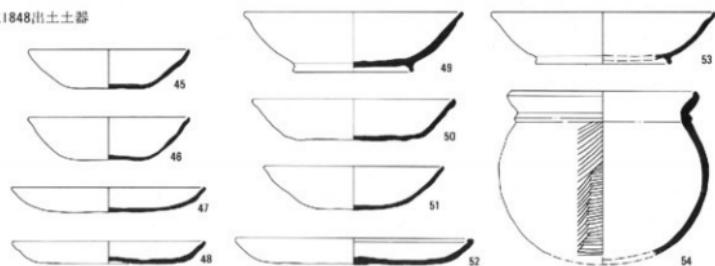
SE1801出土土器



SE1898出土土器



SK1848出土土器



SK1847出土土器

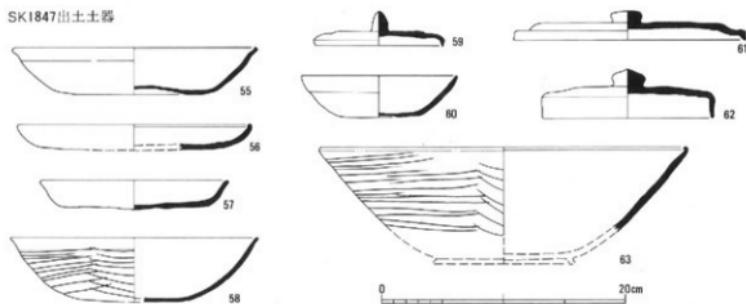


fig.26 SE1801 · SE1898 · SK1848 · SK1847出土土器

3. 木器 (PL.15)

今回の発掘調査で出土した木製品は計30点余ある。その内訳は、曲物の底および側板7点、横棒5点、削り掛け5点、棒状品6点、独楽1点、刀子柄1点、挽物皿1点などである。その多くのものはSK1796、SE1801、SE1898から出土している。

装飾棒 (fig.27-1, PL.15-1) SK1796出土 断面を八角形に作り各面に凸線を浮彫した装飾を施していたらしいが、いまは三面にしかみえない。一端の木口は削って調整し、他端は欠損している。軸内部は腐蝕で孔があき、茎孔と見なして、何かの柄である可能性もある。

独楽 (fig.27-2, PL.15-2) SK1796出土 広葉樹心特材の樹皮を剥ぎ、上端を平坦に仕上げ、その端部より1.6cm以下を円錐形に削りあげているが、頂部の径0.7cmが折損している。恐らく軸を作り出していたのが折れたのであろう。上端面には細い刻線が多数あり、中心部に径1cmの墨痕がある。また下半の側面にも横に走る墨線を書いている。

削り掛け (fig.27-3~5, PL.15-3~5) 板目材で、粗削りの短冊形薄板の上端を主頭状に削ったものである。3.SX15出土両側縁に下から上へ向け数ヶ所の切込みを入れている。下部は欠損している。残存長12.5cm。4.SE1801出土 基頭の両側縁に上部から一ヶ所に集中して各6回の切込みを入れ、下端は尖らせている。長さ20.1cm。5.SK1796出土 基頭の両側縁に上部から切込みを入れ、下端を尖らせている。長さ24.3cm。

刀子柄 (fig.27-6, PL.15-6) SK1796出土 広葉樹棒の断面を梢円形に削って仕上げ、柄はわずかに「く」字形に屈曲している。柄元は欠損しているが、柄の中心部分に断面長方形の茎孔がある。柄頭の木口は丸く仕上げている。残存長9.8cm。

加工棒 (fig.27-7~8, PL.15-7~7) SK1888出土 粗削りした細棒の一端11cm間を先端に向けて細くし、その先端を尖らせている。他端は折り取っている。全長24.6cm。8.SK1796出土 径約1.3cmの円棒を先端にむけてわずかに細くし、先端0.9cm間を斜めに仕上げている。この端部とそこより10.6cm離れたところの2ヶ所に、他材との当り痕跡がある。他端は折損しており用途は不明である。現存長35.2cm。

皿 (fig.27-9) SX27出土 全形の約1/4の破片で、著しく腐蝕している。口縁部は外反して立ち上るが上端は欠損している。広葉樹材を用い、ロクロ挽である。復原径18cm余。

曲物底板 (fig.27-10~11) 10. SE1898出土 全形のはば半分で腐蝕が著しい。側板をとめるための木釘が2ヶ所に残っている。径17.7cm。11. SE1801出土 3つに割れており腐蝕が著しい。木釘が7ヶ所に残っている。径約24cm。

折敷底板 (fig.27-12, PL.15-12) SK1796出土 薄い底板の両側は欠損しているが、側面に棒とじ孔がある。全長27.4cm。

横棒 (PL.15-13~14) SE1801から5点出土している。13. 完形で背が直線をなし、肩は曲線となる。歯の引通し線は背に平行して直線で、肩は曲線をえがく、歯数は3cm当り37本である。全長12.2cm。14. 肩が張るもので歯数は1cm当り11本である。

井戸枠 (PL.15-15) SE1801に使用のもので、各辺4段ずつ遺存するが、最上段は腐蝕が著しい。各板の上下中央に長方形の太枘孔が穿たれている。

以上のはかにSD1889の東西溝から、黒漆塗りの皿の漆模のみが1点出土している。

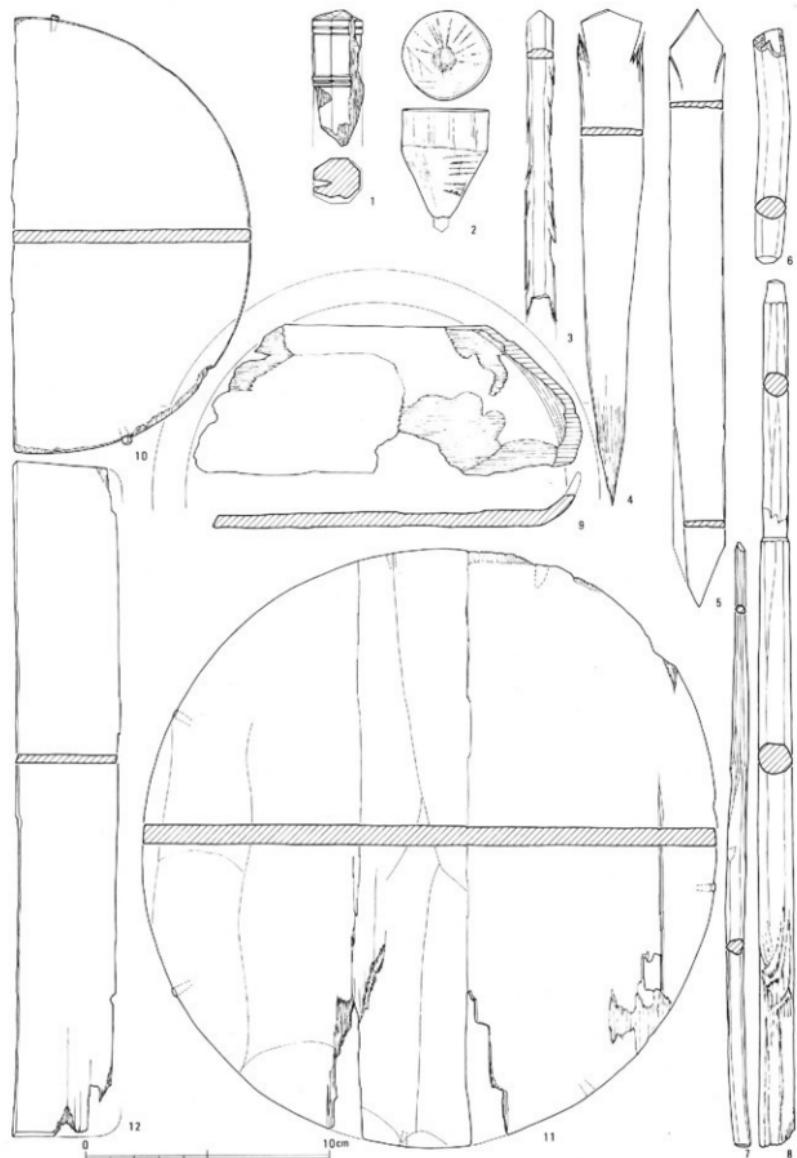


fig. 27 木製品

4. 銭貨と鑄造関係の遺物

今回の調査で発見した金属製品、およびそれに関連する鑄造関係の遺物のはとんどのものは、発掘区東北部で検出した総数31ヶ所にのばる焼土ピットから出土した。ここでの現場における遺物の採取は、こまかい手作業を必要とするため、土壤中の焼土等の埋没土を括して作業室へ持ち帰り、室内でその選別をおこない、1980年3月現在まだその整理作業を続行中である。ここでは、これまでに判明したものに限って概略報告しておきたい。

出土した遺物の内訳けは、和同開珎銭17点、その鋳放し銭4点、同銭倍多数、るつば30点以上、ふいごの羽口25点以上のはか、多量の鋼滓、木炭などである。これらの遺物と焼土ピットとのおよその関係は、tab.3に示したとおりである。31ピットのうち、和同銭を出土したのは8ヶ所であり、複数枚の銭を擁していたのはSX13・14・17・32で、これらのピットはいずれも鑄造に関連した鉢形、るつば等の遺物もまた多い。しかし、土壤の形や規模、埋没の状況などの点では他のものと特に変わることろがない。

和同開珎 いずれも腐蝕、鏽化が著しく進行しており、保存度がよくない。ほぼ完形に近いものは5点で、他は断片である。このうちの1断片は、SX13から出土した径約17cmに復原しうるるつばの内面に、鋼滓とともに付着した状況で発見された。

和同開珎の、鑄造後の整形作業を経ない鋳放しのままの銭は、SX14から2点、SX17から1点出土している(PL.20)。これらはどれも銭2個体分が、めがね状に連なったもので、お互いの銭文は同一方向ではない。他に一点そのような形になると考えられる鋳放し銭の断片がSX31からも出土している。これらはいずれも2個接して連なる以上に、鉢型の湯道の痕跡や、甲張り(はみ出し)のついたままのものはない。

(注)
以上の和同銭の銭文書体や鉢型の大小などを、從来の分類基準に照らして観察してみると、今回出土した和同銭の多くは新和同にぞくし、開の字を「開」につくるなどA型式に該当するらしいが、細かくは今後の検討にまちたい。

鉢形(PL.19)量の多寡はあるが、ほぼどのピットからも出土している。大小さまざまな断片があり、その総数は数え難く、いまも増え続けている。鉢の全形がうかがえるものや、また、鉢の周縁の形状がわかるのはまったくない。現存で最大のものは、平面が7cm余×5cm余大で、その鉢型表面に銭形5個までが窺える。また、もともとの鉢の厚さを保有するものはないが、厚いもので2.2cm前後のものが多いことから、ほぼそれくらいの厚みを有していたと考えられる。鉢の本体は、粘土と砂を混ぜ合わせたものらしく、表面にきめ細い真土の層があつて、そこへ鉢型を押しつけたのち焼き上げたものと思われ、橙赤色を呈している。銭文のある鉢が圧倒的に多いが、銭の背面の鉢もある。まれには溶銅が通る鉢枠の溝(幅7mm、深さ1mm)がついたものもあるが、溝が直接鉢型に通じるものは見あたらない。また、鉢上の鉢型は互に接近しており、鉢型どうしが湯道で結ばれているものもいまのところない。しかし、湯道と考えられる溝の一部が残っているものがあり、溝の断面は径6mmの半円形である。鉢型や溝は銭文のある側が深く、背面が浅く作られている。出土したほとんどの鉢は、実際に溶銅を流し込んで鑄造に使用したため、鉢型面の表面が黒く変色している。

これらの鋳型の詳細な検討が既に終ったわけではないが、和同開珎銭で見たように、鋳型の錢文書体も恐らく同一のA型式であるといえよう。

鏡棒 (PL.20) 鋳型の湯道となった部分の小鋼棒で、長さ2.5cmから3.5cmのものまでが数点ある。その断面は半円形口をしており、径6mm、高さ3mmで、両側面に鏡のはみ出しが異のようについたものがある。この断面形は鋳型に彫り込まれた湯道の寸法とも符合する。

鏡板 S X 17から出土したもので、1.6×1.7cm角の薄板で、少々の返りがある。表裏は磨かれてなめらかであり、一辺は直線的で、もともとの縁であった可能性がある。原形は不明である。

鏡綫 S X 20から出土したもので、数片に折れているが10cm以上はある。幅2mm、厚さ1mmの偏平な細線で、片面中央に浅い溝をいれて凹ませ、その両側を同時に刻み込んでいる。全面に金箔を押している。

るつぼ (PL.20) 1ピットあたりの出土量は、いまのところ多くて5個体ぐらいのようである。30個体以上あるるつぼ(坩堝)のうち、完形品またはそれに近いものは4点のみで、他はすべて断片である。それらはいずれもほぼ同じ大きさで、底の丸い通有の形をしており、径約17cm前後、高さ約7~8cmで、器の厚さも底で2cm、口縁近くで約1cmと厚い。1個当りの容量は約500ccとみられる。もともと片口として作ったものであるとはつきり言えるものはない。その胎土は砂粒が多く含み、現状では淡赤褐色を呈している。また胎土中に筋を混入したものもしばしばみられる。そして、すべてのものの内面全体と口周囲には、かなりの厚みをもって銅滓が著しく付着して凹凸をなし、外面は火熱を受けて層状に剥落するものが多い。また銅滓が外面にまでたっしているものも多いし、ひび割れした中にまで入り込んでいるものがある。断片となったるつぼの割れ口にも一面に銅滓が付着したものも多くあって、鑄銭工房が活動している際に既に破損し、投げ棄てられて付近に散らばっていたのだろう。

ふいごの羽口 (PL.20) 1ピットあたりのふいご羽口の出土量は多くてもせいぜい3~4個体である。全体の形がわかるものはごく少ないが、通有の形狀のものである。現在最長約12cmで、火口側は細く、他端が太い筒状になっており、貫通する孔の径は2.5~3cmくらいである。なかには、両端で細太の差がほとんどない筒状のものもまれにある。胎土は、るつぼに似て砂粒を多く含んでおり粗い。全般に火口の周辺が焼けただれたものが多く、またその端部に銅滓が付着したものもある。

銅滓 (PL.20) 量の多寡はあれ、どのピットからもほぼ満遍なく出土している。大きなものでは拳大ぐらいのものまであり、1個で約125gにもなるものがある。なかには一側面が平坦面をなすものもあるが、そのほとんどは、だんご状のものが重なりあった形をし、大小さまざまである。泡をふいたものや巣の入ったもの、小石混りのものなどがある。

木炭 烧土に混ってかなりの分量の木炭が出た。これらは溶銅を作るための燃料として用いられたものであろう。その樹種は常緑のカシ類が圧倒的に多く、他に若干の針葉樹の炭がある。またヒノキなどの木片が一部炭化した状態の燃えかすも多く出土している。

5. 和同開珍銭の分析と保存

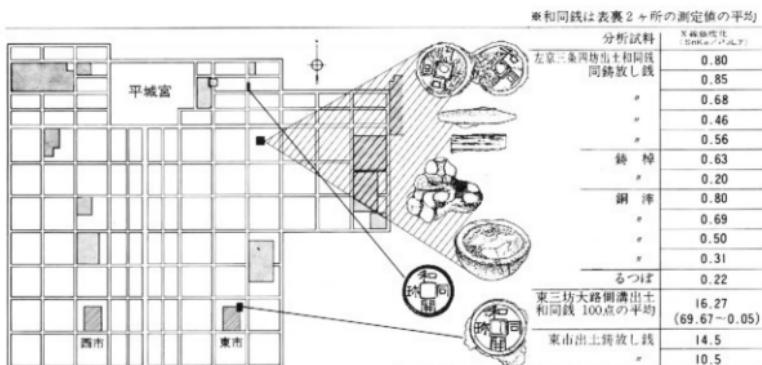
本報告の分析試料は、今回出土した和同開珍銭1点、同銭放し銭4点のほかに、^{118N}銭桿と思われる青銅小棒2点、および銅滓4点、るつば付着の銅滓1点である。さらに、参考資料として、平城京東市出土の和同開珍銭放し銭2点と平城京東三坊大路御溝から出土した和同開珍銭100点を取りあげ、比較検討した。^(註1)^(註2)

和同開珍をはじめとする皇朝十二銭が分析された例はきわめて少なく、甲賀宣政氏による報告がその代表的なものである。同氏は和同開珍銭12点のほか、富寿神宝、承和昌宝、鏡益神宝の三種を除く九種の皇朝十二銭（合計29点）を分析している。これら銭貨の主な成分は、銅、錫、および鉛である。また、不純物として、銀、砒素、ビスマス、鉄なども含まれている。和同開珍銭12点の分析結果では、主要成分である銅の平均含有量が79.4%（最高90.93%、最低53.88%）、錫のそれは6.5%（最高10.27%、最低2.568%）となっている。また、鉛の平均含有量は6.4%（最高32.19%）で、全試料12点のうち4点には痕跡程度にしか含まれていない。また、長年大宝銭の銅の含有量は71.50%、錫は1.48%、そして鉛のそれは19.50%であり、貞觀永宝銭では銅が52.84%、錫1.008%、そして鉛が34.145%含有されている。なお、分析された銭貨はいずれも1点のみである。

皇朝十二銭は、その主要成分のうち、錫と鉛の含有量がその種類によってかなり異なることがわかる。本試料の分析に際しては、皇朝十二銭の特徴が主としてその錫と鉛の含有量の違いにあることに注目し、錫に対する鉛の含有量比を相対的に比較することとした。本試料の表面はサビで覆われており、また、さびていない部分を削り出しての試料採取も困難であったため、定量値を求めることができず、ここではサビ表面からの分析を行なった。したがってあくまでも相対的な含有量比を測定し、試料相互を比較したものである。甲賀氏が分析された銭貨の保存状態は定かではないが、サビを削り出して地金を採取されたことに違いない。しかしながら、銭貨の厚みは和同開珍では平均0.4mmと相当に薄く作られており、さびていない地金と思われる部分でも黒色を呈して腐蝕が進行している場合がある。そうすれば、溶出しやすい銅や鉛の変動が起り、表面のサビを削り落したとしても銭貨本来の組成成分と若干異なる組成値を示すことがあるので注意を要する。^(註2)

非破壊的手法による螢光X線分析 分析試料を破壊することなく分析できる方法は螢光X線による分析である。同法は、X線管から発生する一次X線を試料に照射するだけで、含有元素の存在を知ることができるものである。一次X線を試料に照射すると含有元素は励起され、元素特有の特性X線を二次的に発生する。その二次X線の波長を分析することによって定性分析が、その強度を測定することによって定量分析が可能となる。

螢光X線分析法では、銭貨を破壊しないで測定することができるけれども、銭貨表面のサビからの分析をすることになり、それは遺物本来の成分を示さない。本試料の場合、表面には緑色素のサビが全面に発生しており、試料相互の組成成分量は相対的にのみ比較することができる。螢光X線分析で得られるSnKa線（錫）とPbL₂Y線（鉛）のピークにおけるX線強度は各元素の含有量に比例しているので、これらのX線強度から各試料の錫と鉛の相対含有量比が得られ、X線強度比（SnKa/PbL₂Y）は試料相互の材質的特徴を表わすことができる。



tab. 5 和同開珎銭の螢光X線分析

結果と考察 tab. 5 は今回の出土品について螢光X線分析をおこない、錫と鉛の含有量比をX線強度比($\text{SnK}\alpha/\text{PbL}\gamma$)で表わしたものである。また、先に掲げた京内出土の参考資料についても同様の方法で測定し、合わせて紹介している。

銭貨として完成され、流通したであろう京内出土の和同開珎銭 100点に含有されている錫と鉛のX線強度比は平均16.27である。その最高は69.67、最低が0.05を示し、バラツキは著しく大きい。一方、今回出土した鉛放し銭など5点のそれは、平均0.67であった。しかも、その最高は0.85、最低は0.46であり、京内出土の和同開珎銭に比べてかなり小さい値を示している。同時に出土した銭貨以外の試料も全般に低い値となっている。しかし東市出土のバリの付いた鉛放し銭の場合、分析試料2点のX線強度比は同じ鉛放し銭の今回の試料とは異なり、10.5、14.5（平均12.5）を示した。これは、むしろ京内出土の和同開珎銭100点の平均値に近似している。

これら両者の鉛放し銭における錫と鉛の含有量比の隔りが何らかの意味を有するとすれば、規格品であるべき銭貨の管理体制や私鑄錢横行という当時の事情を知るうえで興味ある問題を提起するかもしれない。今後の銭貨研究における材質上のひとつの課題である。

銭貨・錢范の強化措置 出土した銭貨の大半は、内部近くまで腐蝕が進行しており非常にもうくなってしまっていた。それゆえ、無難作に表面付着の泥やサビを落すことができず事前に強化する必要があった。また、鋳型も概してやすく、角ばった部所も丸味をおびてしまっている状態である。これらのすべてを合成樹脂によって補強強化した。前者には、アクリル系合成樹脂（商品名：パラロイドB72）を、後者にはイソシアネート系合成樹脂（商品名：サンコールSK-50）を主として用いた。特に、鋳型の場合には断力性のあるアクリル系合成樹脂で全体を補強し、その表面はイソシアネート系合成樹脂で硬化した。なお、処理方法は毛筆で少量ずつ塗布し、常温で風通しの良い場所で乾燥させた。

(註1)『平城京左京八条三坊発掘調査報告 東市辺東北地域の調査』奈良県 1976

(註2)『平城宮発掘調査報告V』奈良国立文化財研究所学報第二十三冊 1974

(註3) 甲賀宣政「古銭分析表」考古学雑誌 第9卷第7号 1918

6. 植物遺体と年代測定

今回の発掘区の北西寄りには中世の遺構と考えられる北から南への流路があり、その河床の確認のため東西トレンチを設けたところ、その河床のさらに下層(奈良時代遺構面下約60cm)で、調査区全域に広がる砂礫層のあることがわかった。この砂礫層は旧河川の氾濫原で平城京造営以前のものであり、この層には大小の流木、また砂礫にはさまれたブロック状の黒色粘土層が所々にあり、そこには樹葉・種子等の植物遺体が含まれていた。この砂礫層の広がりを確認するため調査区の各所で設けたトレンチ (fig. 28) から出土した流木は、その一部を切断して取りあげた。樹葉・種子は現地で出土したものを探集すると同時に、一部については植物遺体包含層をブロック状で取りあげ、これを洗浄してサンプリングした。これまでに植物名が判明したものを tab. 6 に示した。流木の幹・枝の樹種同定は、顯微鏡による木口・極目・板面の3断面における木材組織の検索によつて行なった(学名は『牧野新日本植物図鑑』によつた)。

その結果は、アカガシ亜属に代表される照葉樹林が想定され、これは現在でも奈良市周辺で見られる植生である。

また、この砂礫層の年代を知るために、各トレンチから出土した流木の一部を¹⁴C年代測定試料として、日本アイソトープ協会に測定依頼した。その測定結果は tab. 7 の通りである。

このうちサンプル No.1・No.2 とは同一個体(アカガシ亜属)である。No.1(樹皮部)と No.2(樹心部、炭化)との測定結果に630年もの開きがあるのは根元における幹周囲が2.15mもの大木であるから樹心部と樹皮部との年輪差をある程度考慮にいれなければならない。ちなみに根元から約3.0mの位置における年輪数は234であった。

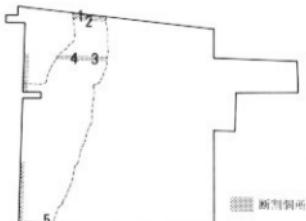


fig. 28 年代測定用試料採取位置図

科名	種名(学名・科名)	山土 領域
Taxaceae イイノキ科	<i>Taxus cuspidata</i> Sieb. et Zucc.	幹、枝、種子
Fagaceae 殻斗科	<i>Cyclobalanopsis</i> sp.	幹、枝、葉、種子
Ulmaceae 漆樹科	<i>Ulmus</i> sp.	幹
Aceraceae カエデ科	<i>Acer</i> sp.	幹、枝
Hippocrateaceae ヒッコリ科	<i>Aesculus</i> sp. (var. <i>Sebacea</i> Blume)	幹、種子
Sapindaceae ムクナヅキ科	<i>Sapindus Mukorossi</i> Gaertn.	幹、枝
Theaceae アマツキ科	<i>Camellia japonica</i> L.	枝
Styracaceae エゾノキ科	<i>Styrax japonicus</i> Sieb. et Zucc.	種子

tab. 6 植物遺体一覧表

No.	C-14年代
1	3990±90y.b.p. (3870±85y.b.p.)
2	4620±90y.b.p. (4490±85y.b.p.)
3	4020±70y.b.p. (3910±65y.b.p.)
4	3930±95y.b.p. (3820±90y.b.p.)
5	5410±110y.b.p. (5250±110y.b.p.)

年代は¹⁴Cの半減期5730年(カッコ内は1.1Myrの約3568年)に基づいて計算され西暦1950年よりかかる年の差(years B.P.)として示されている。

tab. 7 ¹⁴C年代測定結果



fig. 29 流木埋没状況

IV 結 び

今回の発掘調査地は、平城京左京三条四坊七坪に位置する。調査範囲は、七坪内の中心部分を含む南西の区画にあたり、坪の $\frac{1}{4}$ ほどになる。調査地周辺は、平城京内にあって近年市街地化が特に著しい地域である。発掘調査が奈良郵便局庁舎建設のための事前調査であるとはいえ、この地域にあって坪内の状況を知る上で貴重な資料を得ることができた。この調査で検出した遺構や遺物は多岐にわたっているので、それらの詳細な検討は後日に待ちたい。ここでとりあえず一応のまとめをして、平城京研究の資料としたい。

この七坪は、平城京造営当初から平安時代初期に至るまで、継続して利用されている。遺構を検討した結果、奈良時代初頭、奈良時代中頃～後半、奈良時代末期、平安時代初期の4時期に区分することができた。発掘成果として、坪内の利用状況が明らかになったことは言うまでもないが、特に次の2点を注目すべき成果として挙げることができよう。ひとつは、平城京造営当初から坪内を二分する小路が存在することが確認された点であり、もうひとつは、奈良時代中頃から後半にかけて、平城京内の本道跡地で和同開塚を鋳造していたことが確認された点である。以下にこれら2点について、これまでの京内遺跡の発掘成果をふまえて検討を行なっておきたい。

a. 坪内小路について

從来平城京の一般の宅地割については、二行八門十六戸制を基本とし、後に三十二戸制に移行したとする考え方方が有力である。これは、坪を東西（又は南北）に二分し、それぞれを更に南北（又は東西）に四分する方法であり、 $\frac{1}{4}$ 坪（後に $\frac{1}{2}$ 坪）を最小単位とする。近年の発掘結果からみると、左京八条三坊九坪の東半の宅地割は、南北長400尺を数条の溝によって東西に分割して $\frac{1}{2}$ 坪を最小単位としている。また、左京三条二坊十五坪では、当初1坪分の宅地班給がなされ、奈良時代末期又は平安時代になって、東西に二分される程度の面積を所有し得る階層の宅地であると考えられている。

今回発掘調査した七坪は、奈良時代初頭から後半にかけての時期（A・B期）は、南北に二分して利用されており、奈良時代末期以降（C・D期）は1坪分に拡大されたと推定される。ところで、今回の調査で検出した2条の東西溝、S D1851、S D1889の間に挟まれた道路状の遺構S F1890は、溝心々で約3.6m（12尺）あって、位置的に七坪を南北に分ける中心線とは一致することから、これが坪を二分するために平城京造営当初から計画的に設けられた小路であると判断される。しかし、この七坪は、周囲を条坊の小路によって区画されるので、宅地割にあたってこうした小路を設ける必要性はない。平安京では、一般の宅地割は当初から四行八門三十二戸制を基本に施行したといわれ、坪の中央に幅一丈五尺の小路を通している（拾芥抄、延喜式）。ところが七坪における小路は、坪内の状況から考えて平安京における坪内の小路とは意味が異なるものである。この小路が存在する理由としては、七坪自体の特殊な性格から設けられたもの、北方を流れる佐保川の流路との関連から設けられたもの、または周辺の坪（二坪や十坪など）との関連に原因するものといいろいろ考えられるが、今回の発掘範囲だけからは結論づけるのは早急であろう。

b. 和同開塚の鋳銭について

平城京内には、これまで鋳銭司（所）が存在したとは考えられていない。ただ、左京八条三坊の東周辺の発掘調査で、櫛河（S D1300）のなかからパリのついた和同開塚の鋳放し銭が出土したことにより、上流に鋳銭司が存在する可能性のあることが指摘されている。わが国での貨幣の鋳造は、文献

のうえでは、「日本書紀」や「続日本紀」にみれるように持統天皇や文武天皇の時代から行われていたごとくであるが、遺物として確認される銅錢は、「続日本紀」による和銅元年(708)に铸造された和同開珎にはじまる。奈良時代には、和同開珎以降、万年通宝(天平宝字4年(760)铸造)、神功開宝(天平神護元年(765)~延暦15年(796)の間铸造)と貨鉄製造が続く。ところで、鉄錢を駿掌とする官司は、令の規定にはみられない。しかし、「続日本紀」には、和銅元年2月11日条「始置催銅錢司」とあり、同7月26日条「令近江国銅錢」や和銅2年8月2日条「河内銅錢司」のごとく、諸國で铸造されたことが知られる。文献にみえる各地の銅錢司(所)には長門・登美・田原・岡田・葛野・周防などがあるが、和同開珎が铸造された時期にあたるのは、河内・長門・岡田の銅錢司である。このうち長門と岡田の銅錢司推定地からは、錢范やふいご、るつぼなどが出土している。

さて、当発掘調査地区内で検出された焼土ピット群は、和銅当初からのものではなく、それよりやや時期が遡る。しかし、これらの焼土ピット群からは、周縁に甲バリのついたままの鉄放しの和同開珎をはじめ、多量の和同開珎の錢范片、ふいご、るつぼ、銅津、木炭等が出土していることから、ここに銅錢の工房があったことは、間違いないであろう。この焼土ピット群の性格についてにわかに断定することはできない。しかし、焼土ピットの壁面に焼けた跡がみられないとはいえ、焼土等の埋土の堆積が層状になるのがかなりある。それらは廃材等を捨てた單なる土壠とは思われず、铸造に係する炉の基底部(湿気抜き)でないかと考えられる。発掘区全体にわたって後世に大幅な削平をうけているので、上部施設は失なわれてしまったものであろう。さて、この銅錢工房は前述のごとく文献にはみられないものであり、ここでの和同開珎铸造の時期は、奈良時代中頃から後半にかけての時期に限定されている。しかし、この地の位置する左京三条条間路付近は、これまでの発掘結果から平城京の中でも比較的高級な邸宅地であると考えられているが、この七坪の字名が「金池」であることは調査前から注意されていた。これは、今回検出した工房関係遺構との関連を何か物語っているのかも知れない。現状ではこの銅錢工房が公的なものであるか否かを判断することは資料に乏しく困難であり、今後の検討課題として将来の調査研究に期待したい。

ところで、この坪の遺構を一般の宅地と関連させて考えるとすれば、次のようなことがいえよう。文献に記された平城京内居住者は、既に100余例が挙げられている。左京三条四坊の地域では、天平20年11月19日伊賀国阿押郡拓殖郷鶴田販買券によって小治田朝臣藤麻呂が居住していたことが知られる。しかしながら、今回の調査では人名を伴なった出土遺物はなく、居住者を知る手掛はなかった。宅地班給の規模から考えると、平城京の宅地班給基準は知られていないが、藤原京では一般の官吏等は上戸一町、中戸半町、下戸四分の一町であり、また難波京では、三位以上一町以下、五位以上半町以下、六位以下四分の一町以下とされている。このことから推測するとこの七坪の利用が奈良時代初頭から後半にかけて多坪、末期には1坪に拡大しているのであるから、この地にかなり官位の高い貴族が居住していたものと考えられよう。

参考文献

- 『平城京と条坊制度の研究』 大井重二郎 1966年
『平城京左京八条三坊発掘調査概報』 奈良国立文化財研究所 1976年
『平城京左京二条二坊』 奈良国立文化財研究所学報第25号 1975年
『銅錢司の変遷とその立地— 河内銅錢司にふれて—』 栄原永達男 『古代を考える』 10号 1972年
『銅錢司の所在地について』 中村一紀 『書院部紀要』 24号 1972年
『周防銅錢司跡』 山口市教育委員会編 1978年

図 版



PL. 1 6AFG-N・O区周辺航空写真



PL. 2 6AFG-N・O区全景写真





発掘区全景（東から）



発掘区中央部分（南から）



発掘区西半部分（北から）

PL. 4 発掘区部分



発掘部北半部分（東から）



発掘部南半部分（東から）



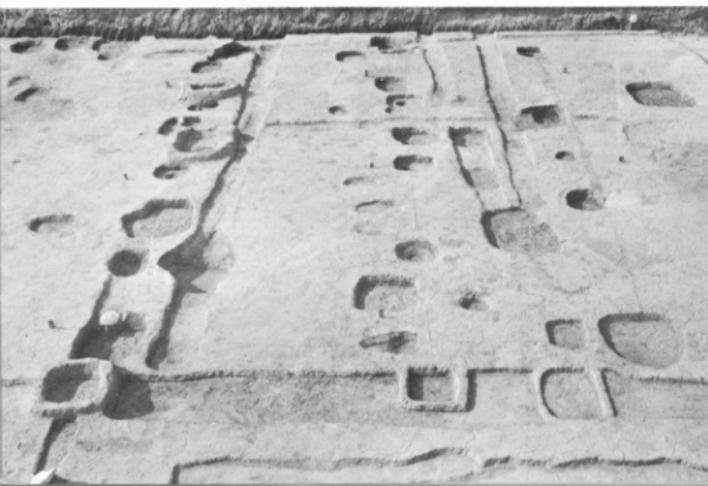
拡張区全景（西から）



S B1831 (東から)



S B1900 (南から)



S B1918
S B1919 (南から)



S B1905 (東から)



S B1823 (東から)



S B1781 (東から)



SB1817 (南から)



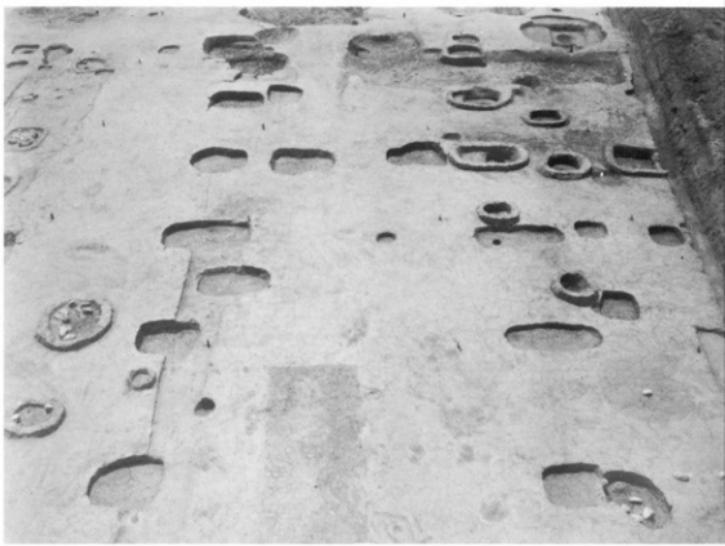
SB1813 (西から)



SB1826 (南から)



S B1787 (南から)



S B1891 (東から)



左: S B1789 (北から)

右: S B1829

S B1830 (南から)





左：S A1790（東から）

右：S A1798（東から）



左：S B1826柱穴（南から）

右：S B1787柱穴（北から）



S B1787柱穴（西から）

PL.10 塚・道路



S A1793 (西から)



S F1890 (東から)



焼土ピット群（南から）



焼土ピット群（東から）



焼土ピット群（西から）

PL.12 焼土ピット

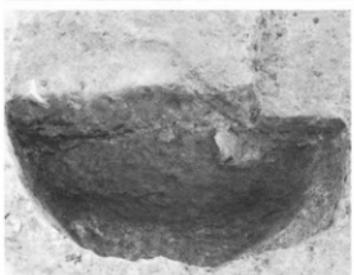
S X21 (西から)



S X14 (南から)



左: S X06 (南から)
右: S X15 (西から)

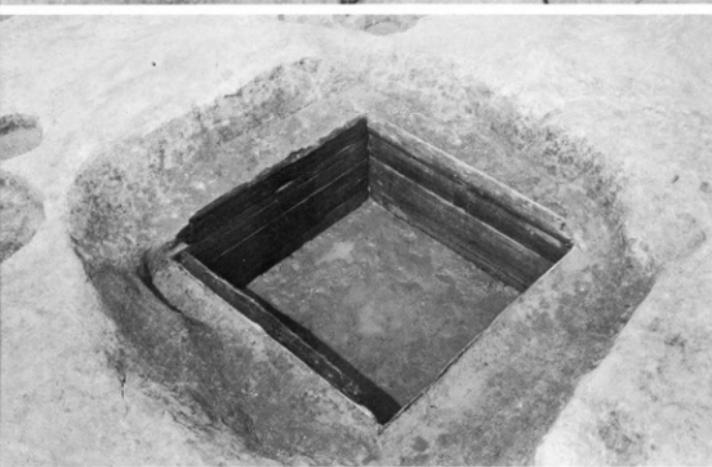


左: S X19 (南から)
右: S X17 (西から)





S E 1801 (南から)



S E 1801 (南西から)



S E 1898 (南から)

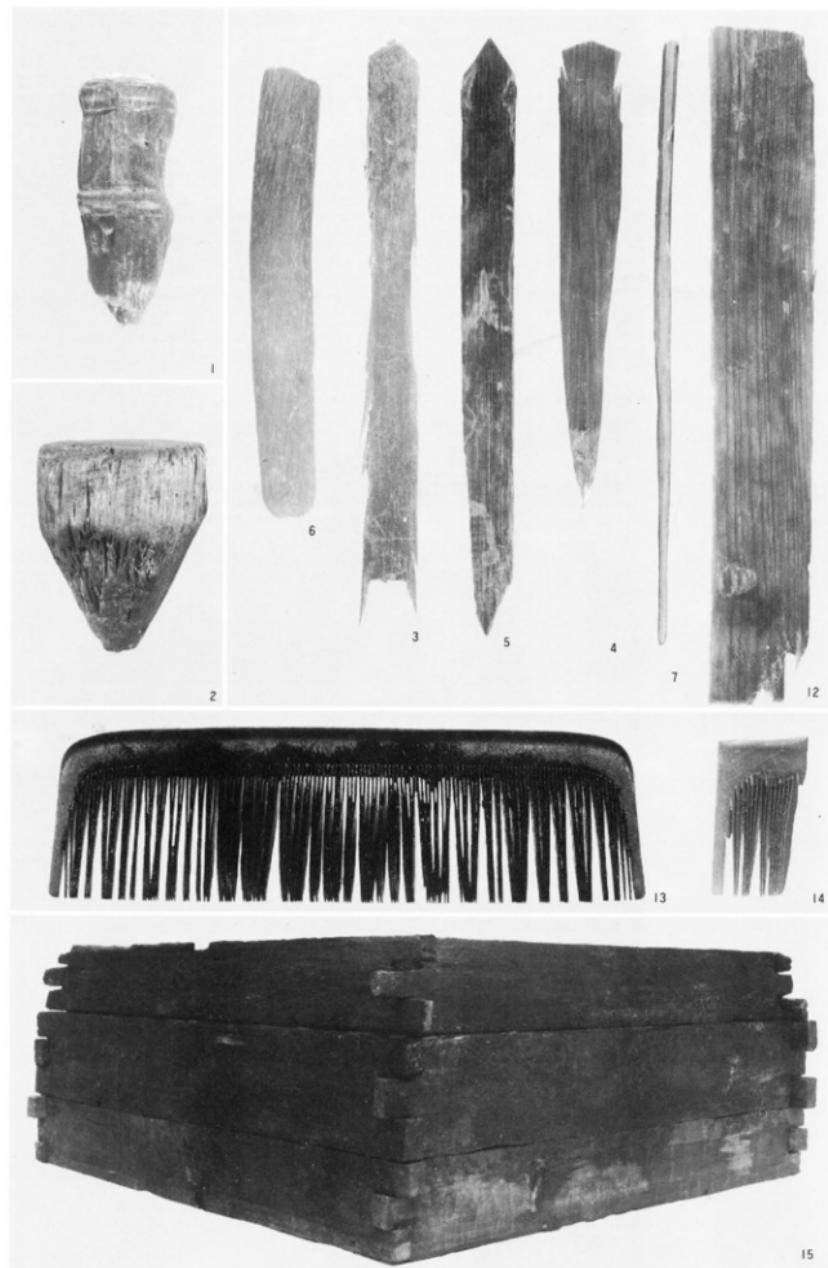
PL.14 河 川



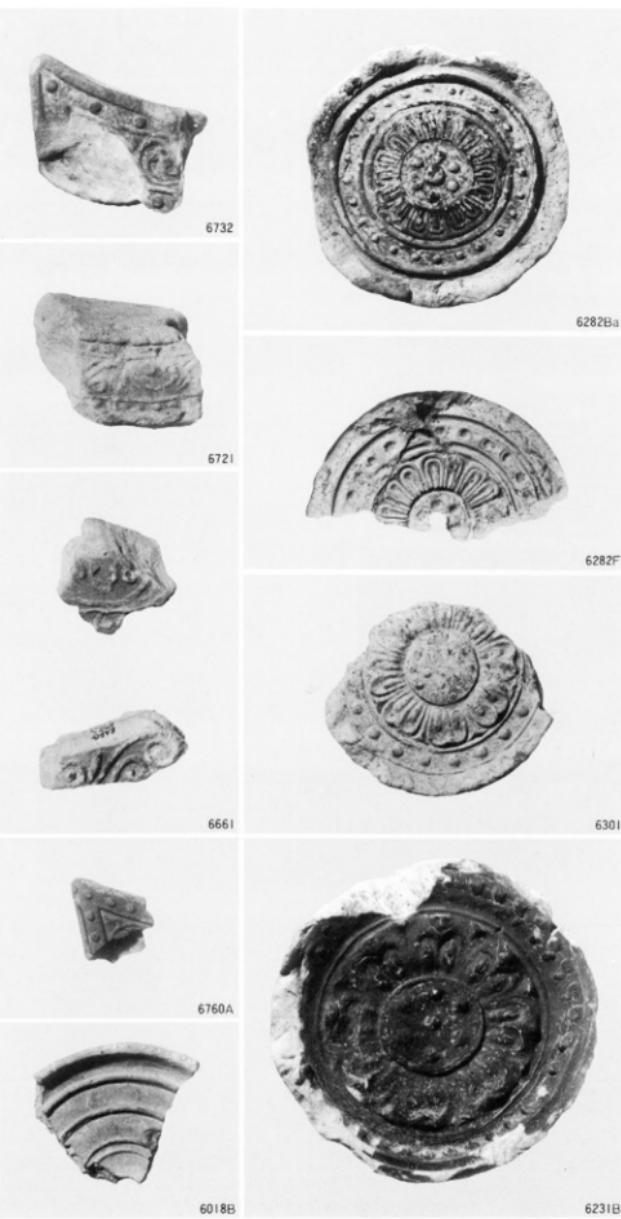
S D1915 (北から)



流木 (東から)



1・2・3・6・13・14のみ 1:1





16



1



15



9



3



17



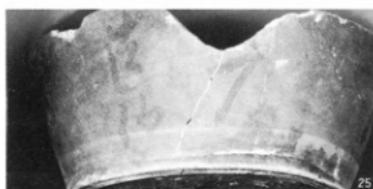
2



7



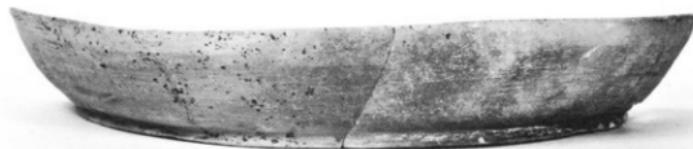
25



25



14



28



28



60



46



51



31



57



32



59



62



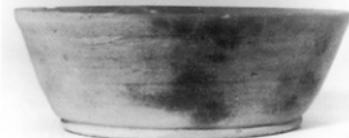
61



42



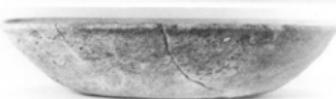
41



43



58



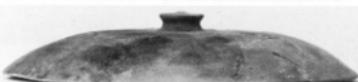
55



50



40



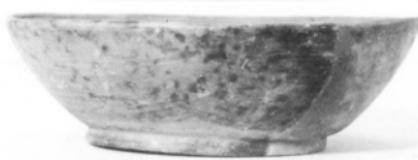
39



49



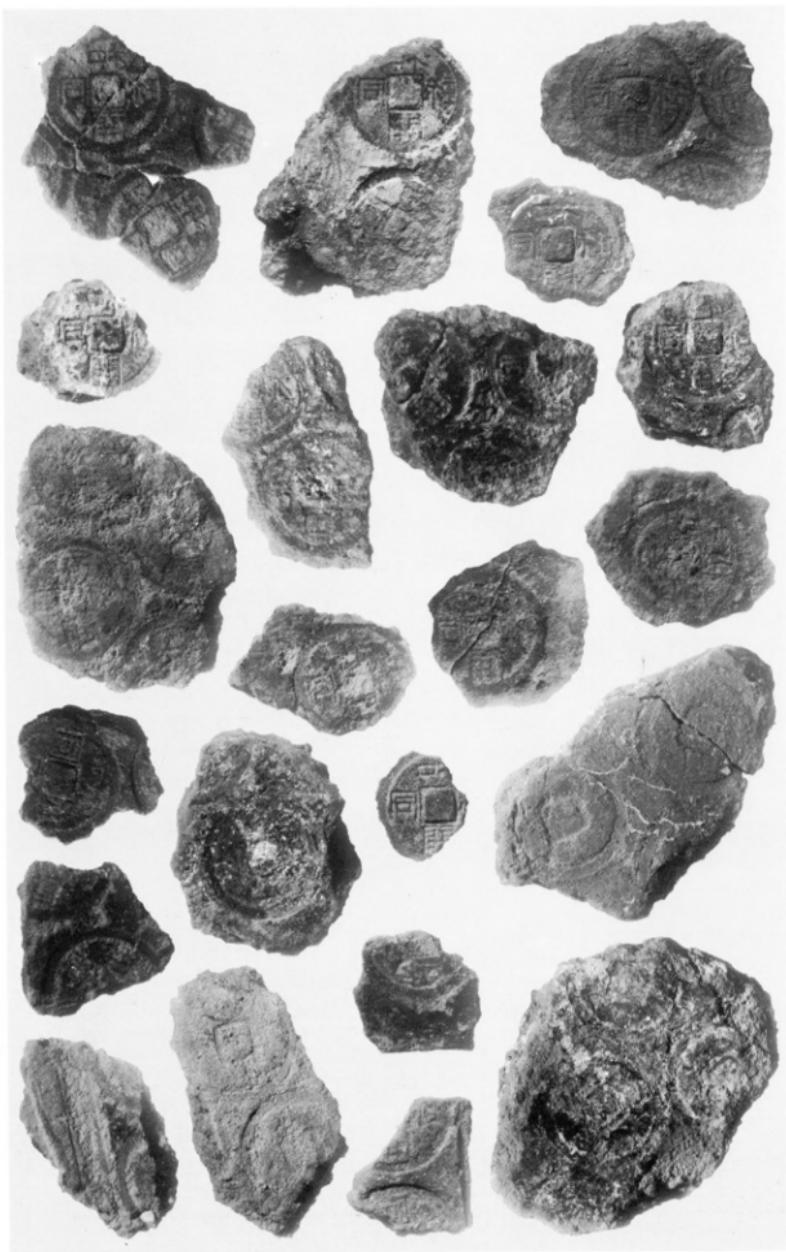
34



35

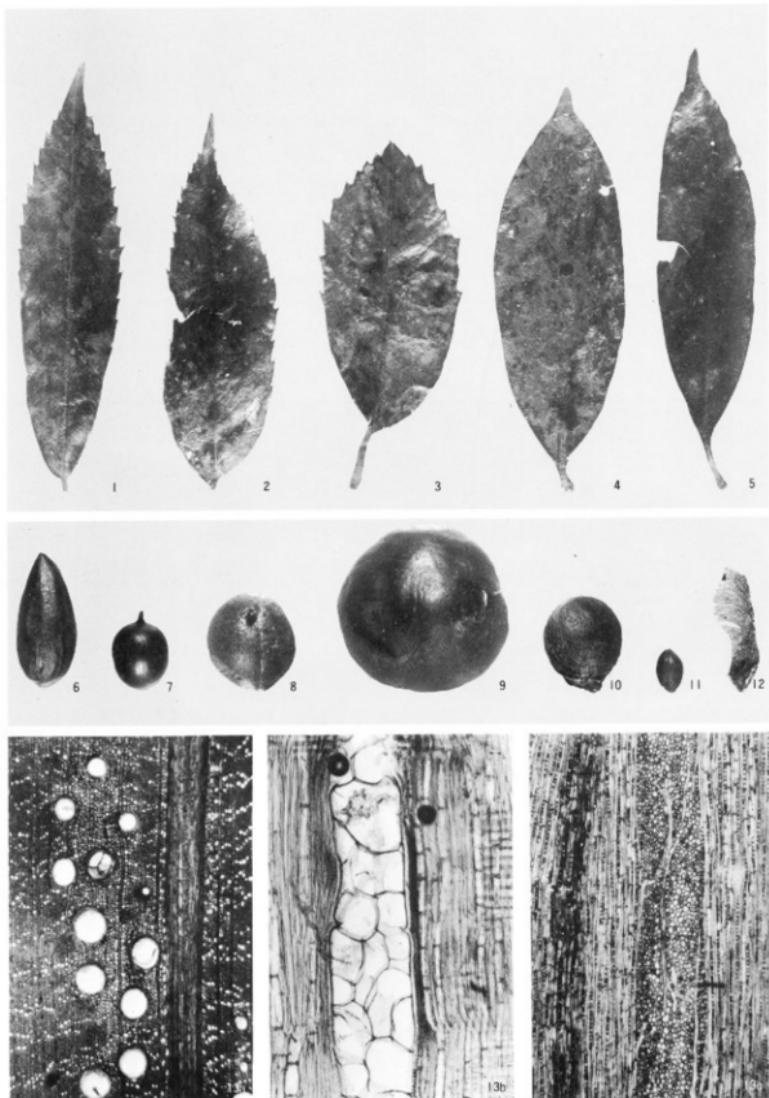


54





上段のみ1:1 右上は平城京東市出土



1. イチガシ *Quercus gilva* Blume 2. ウラジロガシ *Quercus stenophylla* Makino
 3. アラカシ *Quercus glauca* Thunb. 4. サカキ *Cleyera ochracea* DC.
 5. 不明 6. カヤ *Torreya mucifera* Sieb. et Zucc. 7. アカガシ平属 *Cyclobalanopsis* sp.
 8. ツバキ *Camellia japonica* L. 9. トチノキ *Aesculus turbinata* Blume
 10. ムクロジ *Sapindus Mukorossi* Gaertn. 11. エゴノキ *Styrax japonica* Sieb. et Zucc.
 12. カエデ属 *Acer* sp. (1-12 1:1)
 13. アカガシ重属 13a. 横断面(30×) 13b. 放射断面(75×) 13c. 接触断面(30×)

平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報

昭和55年3月25日 印刷
昭和55年3月31日 発行

編集発行 奈良国立文化財研究所
奈良市三条町2丁目9番1号

印刷 関西プロセス
京都市右京区山ノ内山ノ下町13

平城京左京三条四坊七坪(6AFG-N・O地区)実測図

